ぬらりひょんの孫～その隣に立つもの～

ぱむ～ん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぬらりひょんの孫～その隣に立つもの～

【Ｎコード】
Ｎ３５１７Ｎ

【作者名】
ぱむ～ん

【あらすじ】
かつて人は妖怪を畏れた
その妖怪の先頭に立ち、百鬼夜行を率いる男
人々はその者を妖怪の総大将――――
あるいはこう呼んだ
魑魅魍魎の主、ぬらりひょんと……

そして、そのぬらりひょんの側に常に居たとされる者それが…

～第一幕～（前書き）

ははははは！！何やってんだろ。
三作品めだ、頭が沸いたんだろうな。ははははは！！

～第一幕～

関東平野のとある街、浮世絵町――――――

そこには人々に今も恐れられる「極道一家」があるという――――――

「リクオさま～！とうじさ～ん！何処ですか～！」

雪女が本家の庭を駆け回る

「まったくあの御二人は、いつも何時も」

「う～んっう～ん」

庭の端に、腹を抱えたリクオがいた。

「リクオさま！？お腹痛ですか！？ど、如何しましょう！？」

雪女が一歩を踏み出す

「トウジ！今だ！」

「しゃあぁ！あらよっと！」

「え…？」

雪女は気が付いたら、足が縛られ、宙吊り状態になっていた

「え？え！？えええぇぇぇー！？」

「「いっちょ上がり！」」

二人の少年が、雪女を宙吊りを確認し、満面の笑みを浮かべ、ハイタッチをした

「良し！次ぎ行くぞリクオ！」

「勿論！」

「ちょ、ちょっと御二人とも！これ降ろしてくださぁぁい！！」

「あいつ何処まで探しに…」

青田坊と黒田坊の二人が余りに戻るのが遅いため様子を見に来たのだ

「降ろして〜〜！」

「あ！何じゃ雪女その格好は！？誰がこんなことを…」

青田坊が一歩を踏み出す瞬間

「青田坊！ストップ！！」

黒と赤が混じった髪をした少年が、声をかけた。

「二人とも、そこはリクオが落とし穴を作ってたから、こっちから通りなよ」

「おお、藤次殿ありがとうございます」

そして二人で遠回りをした瞬間

「い！？なんじゃぁぁ！？」

「落ちる落ちる！？またやられたぁ！？」

落とし穴に嵌った。しかもかなり深いようで、肩まで埋まってしまった

「「いよっしゃぁぁ！！また成功！」」

少年二人が又してもハイタッチをして成功を喜んでいた

「あ！？若！それと藤次殿まで！？」

「逃げるよ！」

「合点！」

「お二人とも！総大将達に似て…悪戯が過ぎますぞーーーー！！」

縁側で茶を啜りながら、その現場を眺める総大将ぬらりひょん

「こうしていると昔を見ているようですな、総大将」

「牛鬼か、そうだな。あいつが死んで大分経っておるしな」

「総大将の兄貴分、藤次殿の父君…」

総大将ぬらりひょんは、天を仰ぎ、昔を思い出していた。

～第一幕～（後書き）

如何だったでしょうか？短いですが、これから亀更新でがんばって生きます

罵詈雑言でも何でも結構です。感想待ってます

～第弐幕～（前書き）

投下です。

いきなり過去編混ぜて行っちゃった…

～第弐幕～

「でね～、聞いてよ、じいちゃん！皆びっくりしてた！『妖怪』の癖にね」

「アレは傑作だ！今まで出一番良く出来たと思うよ！」

「そうそう！」

「はっはっはっ、そりゃ傑作じゃ、びびっちゃいかんよな」

定食屋で三人してご飯を食べながら今朝のことを話していた

「時に藤次、お前自分の親父さんの事は覚えておるか？」

「何言ってんだよ、当たり前だろ！親父からじいちゃんとの出会いの時の話は耳蛸だったよ」

「はっはっはっ、ならいいんじゃ」

ぬらりひょんは本当に似ていると心の中で考えていた。

顔立ちはそっくりだし、雰囲気など、当時のアイツに匹敵するほどだ

「ふん、最近は昔の知り合いがめっきり減ってしまったのう…」

「ねえ、じいちゃんと藤次の父さんてどういう出会いだったの？」

「教えて欲しいか？それはな…」

藤次が語る。父から聞いた昔の時代、魑魅魍魎が跋扈する数百年前にさかのぼる

肌が薄赤く、髪は短く乱れた赤毛、その頭からは二本の角が覗く美男子と言っていいほどの容姿を持った男は京から僅かに離れた木の上から、ある男達を見つめる。

「最近、京に入った新入りの大将はアイツか！」

と言う具合に久方振りの大きな妖力を感じ、興奮しながら様子を窺い続けてきたが、今日はどうやら違うようだ

「バカな…大阪城に巣食う”奴”を知らぬわけではないでしょう！？羽衣狐は…普通の妖では敵わない！！」

長髪の男がここまで聞こえるほどに声を大きく荒げた

「はっは！あの男、女狐に喧嘩を吹っ掛ける気か。面白い！じゃが、力の差は理解しておるじゃろうに…」

羽衣狐、またの名を白面金毛九尾の狐。京に巣食う大妖怪である。自分ならまだしも他の妖怪、それも出来て間もない組織が、勝てる道理は無いはずだが

「羽衣狐が魑魅魍魎の主だってんなら――――ワシがそいつを超えるまで！！」

その者から溢れる畏、発展途上ながら見事な力を持っているようだ。その後、牛鬼と呼ばれた者と別れて足早に大阪城に向う

「言い切りおった、なるほど興味が出た。直接話してみるかの、女狐に喧嘩を吹っ掛ける訳って奴を。はっは！」

木を蹴り、一直線に彼らの元に向った。
あちらも気付いたらしく此方を向きドスを抜く。
そして、

≪ドォォーンッ≫

着弾

「はっは！久しぶりに京へ入ったの。そこの若いの、お前さんに興

味が出た、何故そこまでするか聞かせろ」

突然目の前に降って来ていきなり、偉そうにふんぞり返った

「何だテメェ、ワシは急いどるんじゃ。退け…」

「そう邪険にするな、ワシがお前さんを気に入ったら、ワシもその女狐の片付けを手伝ってやるわ。おっと、そうじゃ、お前さん名は…」

「…ぬらりひょんだ」

「そうか、ワシは――――じゃ、ほれ、早く話さんと急いでる理由が無くなってしまうぞ」

その台詞で、何かが切れたのか眼つきが変わり、こちらに向ってきた

「切れるな、ぬらよ。落ち着かねば相手の畏れに呑まれるぞ?」

どうやったのか、一瞬にしてぬらりひょんを押さえつける。

「て、っめぇ」

「はっは!怖い怖い……。今まで見続けてきたが、お前さんはもう少し出来たと思ったがな、心を乱し過ぎじゃ。それでは側近だけでその命尽きるぞ?」

思い当たる節があるのか、それから、自分の向う目的を話し始めた

「…なるほどの、人間に惚れたか。…如何じゃ、ぬらよ。ワシと義

兄弟の契りを交わさんか？ワシはおぬしが気に入った」

「何言ってやがる、ワシは急いでると言ってるだろうが！」

「おお、そうじゃったそうじゃった。ならば、全てが片付いたら交わすとしようかの」

ぬらりひょんを開放し、準備体操を始める

「桜姫は確保したろうかの。傷一つ付けたりせんよ」

「ワシは助かるが、あんたに何の得がある…」

「言ったじゃろ、興味が出たと、お前さんとその娘の過ごす姿を酒を片手に楽しませてもらうとするさ。妖怪と人間が仲睦まじく過ごす姿と言うのは一度見てみたかったからの」

――――は酒を片手に、ぬらりひょんはドスに手を掛けながら、二人並び大阪城に足を進めた。

「ぬらよ、お主は先に行け。ワシは、こそこそ行ける妖怪ではないのだ。壊しながら進む、なに時間は掛からん、すぐに追いつく」

大阪城の門を前に――――が言った

「気にしねぇさ、尤も遅れて獲物が無くなっててもしらねぇぞ」

ぬらりひょんが正面から門を潜るが、門兵は気付かない

「はっは！流石はぬらりひょん、見事に気付かれんか。ではワシも行くか…」

大きく一歩踏み出す。当然先程のように気付かないはずもなく、その異形の角を見た門兵が増援を呼ぶ

「はっは！死なぬ程度に手を抜いてやるわ！せいぜい粘れよ？人間！！」

口の端を吊り上げ、喜悦の表情を浮かべた

「鬼に、横行なし！！我が名は酒呑童子、推して参る！！」

「てな感じで、そのまま…っていねぇ！？」

辺りを見回すと、二人が消えていた

「おい、坊主？」

後ろから店主が話しかけてきた。

「さっきの客の知り合いだろ、代わりに金」

手を出す店主、にこやかだが、青筋が見える

「は、ははは、わかってますよ！（あの、やろぉぉっ！！）」

今月の小遣いがまっさらになった瞬間だった

～第弐幕～（後書き）

どうだったでしょうか？

酒呑童子は日本における三大妖怪に当たるわけですが、ぬら孫で出てなかったんで出しちゃった。主人公はその息子

なのでリクオと同じ４分の一の妖怪と言う事ですすみます

半分じゃ？という方は調べたら説の一つとして人間と何かの間に生まれたのが酒呑童子という事なので調べてはいかがですか？

新しいことを知るチャンスです！

偉そうで御免なさい。感想待ってます

～第参幕～（前書き）

更新しました。まだ小学生編から抜け出せません。

原作では一話だけなのに……

～第参幕～

「……帰るか」

散歩を日課にしている藤次は、その日も三キロほど歩いていた。
何時ものように家路につき、学校の準備にもどるのだ
家といっても、ぬら組本家に居候していて、リクオとは幼馴染の親友同士だ

「お帰りなさいませ、藤次殿。若様(リクオさま)はもう仕度をしています、急がれますように」

「解ってるよ、準備はっと・・・」

そして、準備を済ませ、玄関に向うと待ち構えていた影が

「藤次殿、靴です」
「靴下です」
「足洗いです」

「ありがと…」

何時ものように、自分のために用意をしてくれる妖怪だ

「ちょ！？藤次！？何やってんの！靴の上から靴下なんて履いて！しかもびしょ濡れじゃないか！？」

「なんと…！！」

こういうことも日常だ

「ホントだって！僕のお爺ちゃんは妖怪の総大将なんだから！！」

「ぬわっ！？なんだ……？」

大声に驚いて居眠りを決込んでいた藤次は眼を覚ました。
だんだん騒ぎは収まってきているが、騒ぎの中心に居るのはリクオだ

「あ、朱天君。さっき奴良くんが妖怪妖怪って騒いで、清継くんの発表に文句言ってたの」

親切なクラスメイトが事細かに教えてくれた。
妖怪を悪者にされて、否定されて悲しくなったのではないだろうか。

「これが今の時代の妖怪に対する認識だ。俺は余り気にしないが、リクオは優しいから気にし過ぎなければ良いがな。関係ない…」

リクオが先に帰ってしまったため一人さびしく帰る。
今日は寄合があるはずだ、騒がしくならなければ良いが、なにやらじっちゃんが企んでいる様子。
一波乱ありそうだ

「三代目の件…このワシの孫リクオを据えようと思ってな」

（ほら来た、面倒なのが……俺には関係ないか……）

間が悪いというか、何と言うか。

「奴良組72団体…構成妖怪一万匹が今からお前の下僕じゃ！！」

「い、嫌だ！こ、こんな奴らと一緒になんか居たら、人間（みんな）にもっと嫌われちゃうよ！！」

当然こうなる、否定され悪行を教えられ寄合でも悪行を自慢する。リクオには耐えられないのだろう

「何を言っておる。藤次お前からも何か言ってやらんか」

（何故俺に振るか……関係ないだろ）

「妖怪がこんな悪い奴らだって知らなかった！お爺ちゃんになんか……全然似てないよー！！」

走ってその場を後にするリクオ

「さてと、俺もこれで失礼させてもらうよ。人を殺して好い気になってる小物が幅利かせてる様な所に何時までも居たくは無いからな……」

リクオに習いその場を後にしようとすると

「き、きさまぁ！！言わせておけばぁ！本家預かりだからと好い気

になるなぁ！」

その物言いに襲い掛かってくる妖怪。
だが、その行動も無駄に終わる

≪ドチャッ≫

「ふべぇ！！」

「いいか、俺は別に好い気になってるわけでも無いし、誰が総大将になろうと関係ない」

紅いメッシュが入った髪が伸び、頭から親譲りの2本の角が覗く。
体付きこそ変わらないものの、畏れの象徴とまで言われる”鬼”がそこに居た

「だけどな、俺が立つのはリクオの隣だけだ。アイツは俺の親友だ、俺は何処まで行ってもアイツの味方で、アイツの敵には容赦しねぇ……」

静まり返る妖怪たち。
ある者は畏れ抱き、ある者は恐怖し、ある者は過去を幻視した。

「んじゃ、行くわ、じいちゃん」

先程までの勢いは何処えやら、姿は人間のそれに戻り、角も髪も元通り

「ん、ああ、行け行け」

リクオを追って寄合から出て行く藤次。
それが見えなくなったら、騒ぎ出す者達

「藤次殿が総大将になられた方が…」
「いやしかし、若様も妖怪変化が出来るやも……」

「総大将、どうやら若はまだまだ遊びたい盛りなお子様な様子、藤次殿も若の隣しかないと言っている……。今一度、代紋に立てた誓いを確認するべきではありますまいか？我ら妖怪は”人間に畏れられる”ものとして存在せねばならんということを———」

「若！風邪ひきますよ」

雪女がリクオを心配し声をかける。アレからリクオはずっと庭で立ち尽くしている

「ほっといてよ！！」

「若……」

それ以上言うことが出来ず、側近の妖怪はそれを見ていることしかできなかった

「ふん！」

「あて！？……って何すんのさ！藤次！！」

「何時までもそうしてんな！皆困ってるだろ！」

いつの間にか隣に居た藤次が、グズグズしているリクオを殴りつけた

「し、知らないよ妖怪なんて！僕は総大将になんかならないんだ！！」

「ふんっ！」

「あてっ！ってだから何すんだよ！」

「お前がどうしようと俺には関係ない、俺はお前の隣に居るだけだ。だけどな、皆が皆あんな小物と一緒な訳ないだろ？だから、何時も一緒に居てくれてるあいつ等だけには謝れ」

「うっ……！」

自分でも八つ当たりだと解っていたのか、素直に謝り、すぐに笑い合っていた

「まったく、世話の焼ける……」

「ありがとうございます、藤次さん」

雪女が隣に来ていた

「お前には関係ないさ、あいつは俺の親友で、弟みたいなもんだからな」

「それでも、言いたかったんです」

「……好きにすればいい、俺には関係ない」

「はい、好きなだけ言わせて貰います」

側近との関係は良好。妖怪嫌いにはならないがそれを率いることは嫌がるだろう。

「関係ない。俺はアイツの味方で、アイツの横に立つだけだ。親父がそうしたように……」

～第参幕～（後書き）

如何でしたか？原作遵守で、ダラダラ行ってます

感想待ってます

～番外幕～設定～（前書き）

設定です。

主人公の名前は酒呑童子の漢字を一個ずつ変換しなおしただけだったりします

～番外幕～設定～

朱天（あけあま）　藤次（とうじ）

身長：小学時１５６センチ中学時１７３センチとかなりの長身

親に酒呑童子を持つ。妖怪クォーターである

容姿は親譲りか整っており、赤毛が入った黒髪を短く揃えている。
妖怪時は身長そのものは変化は無いが、赤毛の方が長くなり、肩まで届き、２本の角が額に出てくる。
リクオと同じで一日の四分の一しか妖怪で居られない。

性格はのんびりしている反面、どこか大人びた達観した考えを持つが、仲間のために熱くなる熱血漢な所も持ち合わせる。
口癖は「関係ない」

両親共に死去しており、親の伝手でぬらりひょんのもとに来る。

特にリクオと仲がよく、悪戯等を共にしていた親友であり、兄のように慕われている。

～番外幕～設定～（後書き）

何かありましたら感想まで

～第肆幕～（前書き）

更新しました。

今回は自分の中でかなり長めです。何時もの大体2倍ですから

無理やり小学生編を終わらせようと思って書いたらこんなことに…

…

～第肆幕～

「なぁ、この状態何とかならないか？カラス天狗……」

「そう言われましても私ではお二人を運ぶことは出来ませんので、こうするしかないのです」

時間は夕暮れ時、その日バスに乗ろうとしなかったリクオに付き合い、ただいま絶賛飛行体験中。

「重くないか？黒羽丸（くろうまる）……」

「はい、人一人くらいなら何とか」

カラス天狗がリクオを、その息子の黒羽丸が俺を掴んでいる。

「それにしても、御二人が遅いので心配して来てみたから良いようなものの、あの距離を歩いて帰ろうなどと、これからは嫌がってもお供をつけますからね。藤次殿も藤次殿だ。貴方が居てなんでこんな事になっているのですか……」

「俺に関係ないし……面白そうだから？」

「ハァ……」

何時もの調子に呆れるカラス天狗

「ねぇカラス天狗、僕って……人間なのかな？」

「そりゃまぁ、お母様もオバア様も人間ですから……」

「だよね！」

「でも総大将の血も当然四分の一は入っております。ですからもっと堂々としていればいいのです」

それを聞いて明らかに嫌そうな顔をするリクオ。
それが少し悲しく、口から言葉が出てしまった

「リクオ、妖怪がそんなに嫌か？」

「嫌だよ、家の組の皆悪さしてるし、皆妖怪を怖がってるんだもん……良い奴がいるのは知ってるけど、やっぱり……」

「そうか……確かに妖怪は悪さをする、それは彼らが生まれた存在理由みたいな物だと俺は思っている。それにな？悪さをする妖怪だけじゃないということだけは覚えておけ。人に幸を齎す物も居るし、人に敵わないほど弱い妖怪だって存在してんだ」

「藤次のお父さんも幸って言うのを齎したの？」

「ははは っ！まさか、親父は人を喰らう妖怪だったんだ、幸どころか災いを振りまく存在だ。だけどな、親父は人を食うのを止めた、そして誰よりも強く俺の憧れだった親父は、人を食うという存在理由を失い四百年経って死んだ。俺は人を殺める妖怪を許さないが否定はしない、それがそいつの生きる意味だからだ」

「解らないよ……藤次も人を食べるの？」

リクオが恐れながら聞いてきた。親友だと思っていた人間が人を食べるなど信じたくないのだろう

「まさか、人なんて食べなくても俺は生きられるし、雪女の飯は美味いからな。……食べようと思えばいけると思うけど」

最後だけ態と聞き取れないほど小さな声で喋った

「え？何？最後聞こえなかったけど？」

「なんでもねぇよ、つまり自分の生き方は自分で決めろって事だ。貫いて親父のように満足して逝ける様に俺はなりてぇけど、人生なんてソイツしだいだ」

リクオはまだ納得がいかない様で考え込んでいるが、ここから先は自分で答えを出さねば先に進まない問題だ。よく考え自分なりの生き様を作れることを期待した藤次だった

「あ！か、帰ってこられた！」

「若！ご無事で」

家の庭が見えてくると、そこには妖怪が集まっており、帰りを心配

し出てきていた

「何の騒ぎだこれは？」

「どーしたのじゃ、皆の衆」

「だって、だって……」

雪女が半分泣きながら、視線をテレビに向けていた。
その視線の先を見てみると見覚えのある景色が映されていた

『トンネル付近……路線バスが生き埋めに……浮世絵小……乗っていたと見られ……』

それは家から小学校までの路線バス、帰るときに乗っていたら巻き込まれていただろう。
これはただの偶然か？

「え……？何で！？バスが」

「おお、リクオ帰ったか……お前悪運強いの～」

リクオは固まっていた。
それをショックを受けたと思った青田坊と黒田坊が声を掛けるがそれに反応を示さず、それどころかどんどん顔を険しくさせていく。

「助けに行かなきゃ……」

リクオは羽織を掴み、そのまま外に向って飛び出した

「カナちゃんを助けに行く！付いて来てくれ藤次！青田坊！黒田坊！みんな！」

リクオの声に惹かれて外に出て行く妖怪多数

「待て！待ち為され！」

それを止める人物が居た。
奴良組の重鎮、相談役の木魚達磨である

「人間を助けに行くなど、言語道断！！そのような考えで我々妖怪を従えることが出来るとお思いか！？我々は妖怪の総本山、奴良組なのだ！人の気まぐれで百鬼を率いられてたまるか！！」

「達磨殿！若頭だぞ無礼にも程があらぁ！」

畏れの代紋の意味を説く木魚達磨、若頭リクオを信頼する青田坊、両者の見解は一致を見せず、ついには喧嘩に発展した

「止めねぇか！」

リクオから出される今までと違った雰囲気に、喧嘩をしていた当事者は勿論、その場に居た者全てがリクオに視線を送った

「関係ないと思っていたが、これは存外面白そうじゃねぇか……」

リクオに何が起こったのか最初に気付いたのは、自身も同じ症状が出たことのある藤次だ

「時間がねぇんだ、おめーのわかんねー理屈なんか聞きたくないんだよ、木魚達磨！」

次第に変わるリクオの姿、髪が伸びて、目つきが鋭くなり、身長すら少し伸び、今までとはまるで別人のような姿である

「俺が【人間だから】ダメというのなら……妖怪ならばお前等を率いていいんだな！？」

それに気圧される者、畏怖を感じるものと様々だがその場の空気を完全に支配していた。
更にその場に降りる紅い影、妖怪変化をした藤次である

「はっは！面白そうだなリクオ。俺は勿論付いて行くぞ？」

「何言ってやがる、お前の場所は俺の隣だろ？付いて来るんじゃなく共に歩け……」

「はっは！言うじゃねぇか、それにしても俺と違って性格までコロッと変ってるんだな」

紅白の少年達が先頭を歩き、その後ろに列なる妖怪達

「さぁ、百鬼夜行だ……」

「ね、ねぇ、あれって何かな？」

「え…さ、さぁねぇ」

崩落した暗いトンネルの中で、バスの乗客は皆生きていた。
運転手が一番重症であるがすぐに死んでしまうほどの怪我ではなく、
一応の応急処置をした。
その後は余り動かず、助けを待とうという事になったのだが、辺りの安全確認だけはしなければいけないので確認をしていたら、隅におかしな集団がいた

「ち……皆生き残ってんじゃねぇか」

「ヒッ！？ど、どなた様ですか！？」

「余りトンネルが崩れなかったようだな……とにかくここに居る全員皆殺しじゃ」

ゆっくり、しかし徐々に足早に近づいてくることに恐怖を覚えた子供達

「ひ……ああ……こっちへ……よ、妖怪……！！」

足早だったのが遂に飛び掛ってきた

「あああああぁぁぁぁ、あああぁぁぁ！？」

錯乱のため動くこともせず、眼を閉じ、ただ叫ぶことしか出来なかった。

「ガゴゼ……貴様……何故そこにいる？」

死んでしまうと覚悟していた子供達の耳に、ふとそんな声が聞こえてきた。

目を開けると、今まで見たことの無い異形の集団が自分達を守っているではないか。

「本家の奴らめ……」

襲おうとしていたもの達は彼等の登場に怯んでいるようだ

「こりゃまた、とんだ騒ぎだな……」

辺りを見回した藤次が呟いた。
問いただされているガゴゼだが、

「はて……私はただ……人間のガキどもを襲っていた……それだけだが？何も問題はないはずだろう」

自分の仕事（おそれ）を全うしているだけだとしらばっくれていた

「子供を殺して大物面か、俺を抹殺し、三代目を我が物にしようとしたんなら……ガゴゼよ、てめえは本当に小せぇ妖怪だぜ」

「なんだぁ～貴様は」

ガゴゼ会の死屍妖怪がリクオに掴みかかろうとするが、それは叶わず

「リクオ様には一歩も近づけさせん。ガゴゼ会の死屍妖怪どもよ…

…」

「なめるなぁあああぁぁぁ……！？」

首無しの糸に捕らわれたその妖怪は、骨が砕ける嫌な音を響かせながら絶命した

「くそッ……！？殺せ！！この場で若を殺せ！！ぬるま湯にそまった本家のクソどももろ共全滅させてしまえ！！」

本家の精鋭を相手にまともに戦えるはずも無く、そこから消化試合のように、まるで戦いにならなかったが、ガゴゼはそこで苦し紛れの策に出た。

「こいつらを殺すぞ！？若の友人だろ！？殺されたくなければ俺を……」

だが、そのような苦し紛れが看破できぬはずもなく、先回りしていたリクオに斬り付けられた

「が、ガゴゼ様！？よ、よくもきさまらぁぁ！！」

逆上した妖怪がリクオの背を襲うが、リクオは一切反応しない

「おらぁっ！……俺の出番はこれだけか？後は皆やっちまってるし……」

藤次が阻み、蹴散らした。
そこからリクオの口上が続く

「俺が三代目を継いでやる！人にあだなすような奴ぁ、俺が絶対ゆるさねぇ！世の妖怪どもに告げろ、俺が魑魅魍魎の主となる。全ての妖怪は俺の後ろで百鬼夜行の群れとなれ！」

リクオの一連の姿を見て震える者、畏敬の念すら抱いたもの。様々だが、その場に居るもの全てが思ったことだろう「この方こそが闇世界の主なのだ」と

「この達磨……知っていながら今気付いた……」

木魚達磨は両膝を折り、まるで眩しいものを見詰めている様に目を細めていた

「どうだい？達磨。俺の親友は……」

「はい……素晴らしいものです……」

「はっは、そりゃ良かったっと、時間だな」

「は？」

藤次の言葉に反応するように、リクオが倒れてしまった

「り、リクオ様！？ど、如何されましたー！？」

「急に倒れられて……」

「まさかやられていたのか！？」

僕妖怪が挙って近寄りリクオの容態を確かめる。どうやらリクオが人間に戻ってしまってるようだ

「ああ～、心配いらんと思うぞ？多分時間切れだ。俺もだし……」

そこには妖怪変化が解けた藤次の姿があった。

「まさか……四分一、血を継いでるからって、一日の四分の一しか妖怪で居られないとか……？」

「リクオがそうかは知らんが俺はそうだな……」

暫らくの静寂、そして

「「「「えええええええええぇぇぇーーー！？」」」」

溜めて溜めて、爆発した……

数年後―――

「今年も……またダメか……？」

「ダメですねぇ……では早朝まで及びましたが今回の会議でも……奴良リクオ様の三代目襲名は先送りという事で……」

「ぐぅぅ〜〜〜……誰も賛成してくれん……」

「仕方ありませんよ、総大将……普段の若がアレでは……」

木魚達磨の指差した先には中学生になったリクオの姿があった

「じゃ、母さん行って来るね！」

「あらリクオ、早いのねぇ。お弁当用意してないわ」

「いいよ、購買で何か買うから」

「あ、若！！おはよーございまーす！！ご支度を……」

「おはよ、良いよ自分でやったから。そうだ！藤次は？」

「藤次殿でしたら、先程帰ってらして、今お支度をされてますが？」

「何時もの散歩か……それじゃ待ってようかな」

藤次が来るのを待っているリクオ。
大体の朝はこの様に二人して登校している

「何で……あれ以来変化せんのかの～……」

「あの時は立派な妖怪になると思いましたが……」

「そりゃ、切欠がないとな……自分の意志じゃ難しいもんなんだよ」

「これは藤次殿、おはようございます。……自分の意志では難しいというのは経験からですかな？」

「そんなもんだ、俺の場合、自分から求めたから割と早く馴染んだが、リクオは妖怪になる事を良しとしてないとこがあるからな。どっちにしろ俺には関係ないが……」

「お前もお前で、妖怪変化はするがいまいち悪事に手を出さんしな……」

「リクオにやる気がないんじゃ意味無いしな……」

ぬらりひょんは肩を落として落ち込んでいる

「あ、おじいちゃんまた会議？」

「う……む」

「だめだよ！悪巧みばかりしてちゃ！ご近所に迷惑をかけない様に！じゃ、学校に行って来ます！ほら、藤次行くよ」

「おととっ！？」

藤次の手を引き走っていくリクオ。

「う～む、むしろ立派な人間になってる気がしますな……」

ガックリと先程以上に肩が落ちた

「ほら、今日は日直だろ？急がないと……」

「それは俺の仕事であってお前がこの時間に出る意味は無い気がするんだが……」

「何言ってんのさ手伝うよ、それじゃ、いってきまーすっ！」

「……お前が決めたことなら俺には関係ないが……ん？」

家を出たところで、灯篭に乗っかっている雪女が居た

「お～い、氷麗（つらら）！準備しないと遅れるぞ？弁当忘れたから出来ればそれも宜しく～」

「は～い！わかりました～！」

返事をしてそそくさと中に戻っていく雪女、その会話に頭を捻ったリクオ

「ねぇ、藤次。雪女は何処かに通ってるのか？僕聞いたこと無いんだけど？」

「ん～～……気にすんな。ほら行こうぜ！」

「あ！待ってよ、何だよ教えてくれよ！」

二人の少年が駆けて行く。
次代の総大将とその腹心と言われた彼らが此れからどの様な道筋を辿るのか。
それは此れから紡がれる……

～第肆幕～（後書き）

三毛猫ヤマト様に戴いた感想から主人公のことを見直そうと考えたのですが、紗凪波様から戴いた意見からこのまま書くことにしていきます。

一応、理由などは考えたので、物語が進んだらその辺の事情を入れていきます。

御二人ともありがとうございます！
これからもご指摘、アドバイスをお願いします！

皆さんのご意見で私は成長していけます！感想待ってます！

～第伍幕～（前書き）

更新です！

最近新刊ばっかで金が足りません……

ぬら孫勿論即買いですが

～第伍幕～

「妖怪には世代交代があり、いつの時代も我々の日常で悪事を働いている！」

何が如何なってこうなった？
昼休み後の散歩の後で少し送れて教室に入ったら、何故か隣のクラスの清継が来て妖怪談義を行っていた

「おい、リクオ。何でこんな事になってんだ？清継は妖怪否定してなかったっけ？」

「いや、僕も分からないけど、昼休みを使って巡回して妖怪について語ってるんだって……でも、学校でそんな話したら馬鹿に―――」

「きっとそうなんすよ！賢いなー」

「清継君かっこいー！話が変でも許すー！」

「うむ、支持者はいるな」

「ええぇぇー！なぜ！？」

この手の話はある程度歳を重ねた方が、面白さを増す場合がある。
これもその類で、しかも実体験があるからだろう

「僕は目が覚めたんだよ……あるお方によってね」

「あるお方……？」

「そう……そのお方は闇の世界の住人にして若き支配者、そして幼い頃僕を地獄から救ってくださった……惚れたんだよ！彼の悪の魅力に取り付かれたのさ！もう一度会いたい……だから彼に繋がりそうな場所を探しているのさ！」

「大変だなリクオ、気を付けろよ」

労わる様に肩に手を置く

「何人事みたいに言ってるのさ！？君もその場にいただろ！」

「いや俺の事言ってないしさ、ばれても関係ないし」

リクオは頭を抱えて悩んでいたが、藤次は余り気にせず、席に戻った

「なぁ……聞いて良いか？」

「なに？」

「何で俺がこの場にいるんだ？旧校舎に興味ないぞ、俺」

妖怪談義を途中で聴くのを止め、その日はまっすぐ帰ったはずなのに、気が付いたらリクオに手を引かれこの場にいた。
人数は七名、発起人である清継と同行者島、カナ他三人この七名で旧校舎の妖怪の噂を確かめるようだ

「もし本当に妖怪がいて、僕一人でカバーできなかったり、危なかったら手伝ってよ」

「いや、しかしこのメンバーで……」

後ろを見る藤次。
振り向いた先には雪女が人間に化けた及川氷麗（おいかわつらら）と青田坊が人間に化けた倉田（くらた）が居た。こちらに気付いた雪女は手を振り、青田坊は頭を下げた。
メンバーの半分が妖怪（自分とリクオを入れている）と言うなんともおかしな組み合わせだ

「このメンバーって？」

「いや、今関係ないし、気付いてないなら良いわ……」

一見して静かそうな校舎、だが天井や部屋の各所に妖怪がいる。
リクオが必死になって見られない様に、被害が出ない様にやってはいるが如何せん数が多い。
これでよく、今まで雑誌だけですんでいた物だ。確実に退治物だぞ
この数は……

「おい、どうなってんだこの数は……じいちゃんサボってんのか？」

「いえ、総大将は確り纏めてくれてます。しかし、総大将もお歳だ、こう言っちゃなんですが二代目が亡くなられてから組は弱体化の一途を辿るばかり、それを知った若ぇ妖怪(やつら)が縄張(シマ)りを荒らしてんでさぁ……」

「最近は本家の近くにも時々近寄る者も出ているんです……」

「なるほどな……」

少し距離を開けて、妖怪組みと話していた。
近くに何かが出ているのは気付いていたし、危なそうなのは、時々追っ払ってたりしていたが、まさか縄張(シマ)りがそこまで荒される事態に成っていたとは知らなかった

「自分達としちゃリクオ様に三代目を継いでもらいたいんですが」

「無理かな、アイツにはまだヤル気も無ければ覚悟も無い」

話し込んでいる内にどうやら食堂で最後のようだ。
一番上の教室から虱潰しに探索を行ったため、かなり時間が掛かった。

「氷麗、帰ったら飯作ってくれ、腹減ったわ。この時間じゃおばさんも寝てるだろうからさ」

「解りましたけど、若菜様の事ですからきっとお食事を準備してると思いますよ？」

「……有り得るな、天然の節が有るけど、基本的に万能主婦だからなあの人は」

他愛無い話をしながら探索を終わるのを待っていたら、中から悲鳴が響く

「出番だ、行って来い」

「へい、失礼しやす！」

「いってきます！」

走って中に駆け込む二人、それを歩いて追う藤次

「おら、顔出すなよ……」

途中、妖怪を踏み敷きながら、食堂に入る。
するとそこでは既に退治は終わっていた

「失せな、此処はお前らの縄張(シマ)りじゃねぇぞ、ガキども」

清継と島は気絶をしてしまい意識が無い、カナはリクオの背に隠れ、目すら瞑り恐怖が過ぎ去るのを待っていた。

「……え？な、何？如何いう事……？だって、今君ら学生で……うえ！？」

「だから護衛ですよ、確かカラス天狗が言ったはずですけど？」

「聞いてない……聞いてないぞぉーー！？」

リクオは盛大に混乱していた。
確かに昔から何時も傍で護衛がいたなど今更知ってもと言う気もするが

「それを知らなかったのはお前だけな、リクオ」

「藤次！？君も知ってたの！？」

「いや、気付けよ……あそこまで露骨に周りをうろちょろされたら普通気付くわ」

「そうなんです、聞いてください！藤次さんたら、登校初日でいきなり頭叩いてきたんですよ！？」

「そら叩くさ、学校に来てたんだから……お前は綺麗だからすぐ目立つんだよ……」

そうなのだ、この二人は余りに護衛に適していない。最初に気付いた時、既に二人は周りからかなり視線を集めていた。
倉田こと青田坊はその巨体から、雪女こと氷麗はその美しさから、それぞれあっと言う間に噂になってしまったのだ。下駄箱で氷麗を最初に目撃した瞬間、持っていた上履きを振り下ろしていた。
リクオがどうして気付かなかったのか、今でも疑問が尽きない

「もう！何ですか！？最後が聞き取れません！」

「何でもありませ～ん……」

「僕は人間なの！僕は平和に暮らしたいんだぁぁーー！」

リクオの叫びが木霊した……

～第伍幕～（後書き）

如何だったでしょう？
感想お待ちしております。

そして少し募集を……主人公藤次の畏やら鬼發やら鬼憑やらを考えてもらえませんか？
自分で考えるべきものなのでしょうが、どうにも纏まらず困っています。
出来るだけ反映させられるように、頑張りますのでお知恵をお貸しください！

～第陸幕～（前書き）

更新しました！

ちょい時間が掛かってしまった

もう一つのほうを優先して書いていたからだろうけど……

～第陸幕～

「やっと帰ったかお前達！お前達ま～た学校なんぞに行っとんたんか！」

「当たり前でしょう？中学生なんだから。なぁ、藤次」

「ん～？そうだな……ん～？」

首を捻りながら適当に相槌を打つ藤次

「あのなあ……お前はワシの孫、妖怪一家を継ぎ悪の限りを尽くす男にならんかぁーー！」

「断る……ところで如何したんだ藤次？」

「いや、なんか血の匂いが……」

爺ちゃんを無視して玄関に入ると僕妖怪が何かを食べながら挨拶をしてきた

「……何その高級菓子」

「おっ！いっただっきま～す」

「って食うなよ！？そして爺ちゃん！？またどっかから盗んだの！？悪行は程々にって言ってるじゃないか！！」

後ろで口論するリクオと爺ちゃんを放置して他多数の妖怪に混ざって菓子を食べる

「んぐっんぐっ、ほれもっへきはの、へんは？」

「はぁ、そうですが、よくわかりましたね？」

お前のほうが何を言ってるのか解ったのかが凄い。
ちなみに『これ持ってきたの、ゼンか？』と言ったのだが、まったく言葉に成っていない

「んぐっ、此れ位の買えるやつっていったら表でもそれなりに稼げてる奴ってことだからな、それに血の匂いがこれだけあると自然とわかるさ」

合う度に吐血をされたらにおいにも慣れると言うものだ

「ところでリクオ、関係ないけど、それ以上絞めたら爺ちゃん逝っちゃう……」

「え？……うわ！？じ、爺ちゃん？大丈夫！？」

真っ青な爺ちゃんを前後に揺らし、意識を取り戻そうとする間抜けな光景が目の前に広がっている。

鹿威(ししおど)しが軽い音を奏でる。
鹿威(ししおど)しの一番近い部屋でゼンが今か今かと、時期総大将候補のリクオを心待ちにしていた

「おお！若、お久しゅう御座います！藤次も元気そうで何よりだ」

「おう、ゼンも身体は平気か？」

「ぜ、ゼンさんお久しぶり！」

リクオだけ少しびくびくしているが、リクオは昔に比べてゼンさんのことを苦手になっていた。
理由としては昔のように、合う度に、悪戯が如何の妖怪とは如何のと、それは凄いテンションで聞いて来る事にあるのだが、昔は仲がよかった。

「はっはっは！ゼンさんなど……ゼンで良いのに！」

ゼン一派の頭領になる前はゼンに薬草の知識なんかを教えてもらったりと、よく三人で遊んだものだ

「若〜！お茶ですわ〜！」

なにやら危なっかしい足取りで、雪女が給仕をし始めた。
元気はいいのだが、足元が

「「「あ……」」」

まるで走馬灯のように、ゆっくりと熱いお茶が降りかかる。
お盆に載せられているのは三杯、二杯が俺に一杯がリクオに向って

いるが、俺とリクオは少し距離があったはずなんだが、狙ってるのか？

「おわちゃ～！？」

「熱い～！」

「ご、御免なさい！？フゥ～～！」

「ちょ！？それはシャレになら――――」

リクオがかかったのは腕、俺は頭からそのままひっくり返った。
雪女がすぐに冷やすために凍らせるが、かかった部分を凍らせるという事は、リクオは腕、俺は頭な訳で結果として、顔が氷で塞がれると

「――――――――――――」

「と、藤次！？大丈夫か！？」

「あわあぁ～～！？」

完全に視界が固まり、凍死寸前になる。

「クルルゥアァァ！何してくれとんじゃい、アマァァ！！リクオ様と藤次……いや、義兄弟達（きょうだいたち）に何かしてみろ！このゼンが貴様の息の根を止めてやる！」

「す、すみませんでした〜！」

（キレてくれるのは有り難いし、謝る事はいい事なのだが、その前にこの氷を如何にかして……あ、意識が……）

その後雪女に運ばれ、風呂に投げ込まれる事になった。
リクオはリクオで、ゼンと三代目についての会話で仲違いをしてしまったとかで、夜の勉強をカラス天狗から受けたとか。
……夜の勉強というと、ちょっとアレだが、内容はぬら組の役割とかそれに関するものだったらしい

「……ん？リクオ、何処行くんだ？」

「ああ藤次、もう大丈夫なの？」

「おう、もうすっかり。で？何処行くんだ？」

リクオの格好はおよそ友達の家に行くような服装ではなく、着物に羽織り、それとお酒を持っている。

「うん、これからゼン君に謝りに行くんだ、結果的に無理強いさせちゃったのは悪いんだし。藤次も行くか？」

「いや、いい。俺には関係ないし……」

「そう、それじゃ行ってきます！」

出かけるリクオを見送って、自室に戻ろうとしたのだが、途中台所当番の妖怪に止められた

「あ、藤次様良いところに、此れなのですがリクオ様が使われると言ってたのですが、忘れて行かれた様なのです」

手に持つのは高級といわれる酒の肴だった

「ああ？たく、しゃぁねぇな、届けてやるよ」

それを受け取り家を出る

「……朧車（おぼろぐるま）で行ったよな、走れば追いつけるか？」

「ごふっ……り、リクオ……？お前が此処へ？お供は如何した……オレじゃお前を守ってやれねぇってのに……」

「カラス天狗、こいつらは……？」

「わかりませんが、ゼン一派の幹部だった思います」

焼け落ちる屋敷、そこで対峙する両者。
ゼンの付き人だった蛇太夫が裏切り、亡き者にしようとした所へリクオが駆け込む事に成功した

「許せねぇ……」

「ど、退け！？リクオ！お前に何が出来る！？」

蛇太夫が首を伸ばし、その牙をリクオに向ける

「下がってろ……」

リクオの雰囲気が変わった。
リクオはその牙の間に護身刀を滑り込ませ、蛇太夫を真っ二つにした

「アンタ誰だよ……？」

「リクオ様、また覚醒されたのですか」

当然今までその場に居たのだから、リクオに決まっているのだが、
余りの変わりようにゼンはそれが誰だか一瞬わからなかった。

「！？リクオ！後ろっ！」

リクオの後ろに迫るのは今までその場に居なかった大きな大蛇。
知性を感じさせない、ただ暴れるだけの妖怪のようだが、その力だけならばそれなりの物だ

「遅いぞ……」

リクオは反撃する素振りを見せる事無く、そう呟いた瞬間、紅い影が大蛇を地に沈めた

「遅いって、どう考えてもそれは無いだろ……あ～あ、こりゃもうだめだ、どうすんだよ肴がダメになっちまったじゃねぇか」

地に沈めたのは追いかけてきて、危険を感じて変化した藤次だった。飛び掛った時、勢いをつけ過ぎたために落とした肴は火の中に落ちてしまい、灰になった

「お前……藤次か？」

「おうゼン、死んで無いようだな」

その姿での会話は初めてだったため、先ず何故変化が起こったのかの説明からになった

「なるほど、四分の一は妖怪だってーのか……」

咳き込みながら、その姿のリクオの三代目を継いで欲しいというゼ

ン。

「……飲むかい？」

その答えを言う事無く、手に持ってきた酒を掲げる。
それにゼンは快く受けながらリクオの杯を求めた

「……俺をあんたの正式な僕にしてくれ、親の代じゃねぇ直接アンタから……」

「俺は僕は勘弁だが、義兄弟の契りってんなら俺も混ぜろよ？」

そして、三人で杯を持つ手を組み、その杯を飲み干した

「……カラスよ、後どれほどの杯を交わせば妖怪共に認められた事になる？」

「え！？」

帰りの朧車でリクオがそう言い出した。
藤次は朧車の上で月を見ながら酒を口にしながらその会話を聞く

「俺は三代目を継ぐぜ」

「その前に昼のリクオがこの事を覚えていたらだろうな。まぁ継ぐためにに忙しくなるなら、手伝うのも吝かではないが」

「そうか、その時は頼むぞ」

「任せな、義兄弟(きょうだい)」

そうして長い夜は明けていった……

～第陸幕～（後書き）

ゼンさん、貴方の漢字がわかりません（泣）
だってゼンで出ないんだもん……

感想待ってます！

～第漆幕～（前書き）

更新です！

最近は体調が定まらない……熱が一日おきに出たりしてダルイ……

でも書くのが楽しいから書き続ける愚か者、ぱむ～んです

～第漆幕～

「朝から宴会なんて勘弁してよ……唯でさえ、こっちは何故か寝不足なんだから」

朝っぱらからカラス天狗が興奮して、豪勢な料理を用意して宴会を用意していた。

「俺はあのまま混ざっても……それよりリクオ、お前足がふら付いてるぞ？」

「うん、頭も痛いし、風邪かな？」

「それは二日酔いと言う物だ……」

リクオは昨日の夜の出来事をまったく覚えていないようだ。
それはそれで良いが体調まで引き継ぐのに、記憶が無いのは何とも憐れさが……

「いいや、とにかく行こう？」

リクオはクラスメイトの家長カナを見つけ足早に歩いていってしまった

「……置いて行かれてしまった」

「もう、護衛の任を受けてる私たちを置いていくからです！」

後ろから歩いてきたのは氷麗と青田坊だった。

「俺はそもそも、奴良組傘下じゃないし、俺が一緒だからリクオにも護衛なんぞいらんだろ？」

「確かにそうですけど、私達にもお仕事があるんです」

「そうかい、俺には関係ないし……リクオの事頼んだわ」

横目にリクオが揺らされているのを見ながら、氷麗の持つ自分の弁

当を持ち上げ、後を頼んだ。
そして大きな欠伸をしながら自分の教室に歩いていく。

「そして……また、なんだな……」

気が付いたら、またしてもリクオに手を引かれ、可笑しな部屋の前に居る。
今回は何故か氷麗も手を引いている。

「此方さん誰？見覚えないんだけど？」

「今日、転校してきました。花開院ゆらです、どうぞ良しなに」

「あ、どうも、京都出身か……花開院ね……」

藤次は一人考え事をし出してしまった。
それを無視し、話は進んでいく。

どれくらい、考えていただろうか、突如後ろから爆発音がして振り向いた。

「浮世絵町……やはり居(お)った」

先程紹介を受けた少女の手に御札と割引券が握られていた

「あ、やっぱり、その筋の人だったか……そして何故に割引？」

「陰陽師花開院家の名において、妖怪(もののけ)よ、あなたをこの世から滅します」

付喪神に分類される妖怪が煙を上げて、微動だにしない。
本来ならカッコいい所だが手に割引券では決まらない。

「お、陰陽師だって……！？け、花開院さん！？今、あなたはそう言ったんだね！？」

清継はやたらと興奮して、叫び声を上げ、それ以外は妖怪が実在すると知ってショックを受けているようだ。

「おい、つら――――」

「ヒィーー！ヒィーー！」

「雪女！？しっかり！」

氷麗は身体をガタガタ震わせて、怯えている。リクオはその代わり様に驚き宥めている。

「リクオ、変わるからお前は話を聞いて来い」

「いいの？」

「ああ、お前陰陽師って知らないだろ？」

「うん……」

「世の中にはそういう人間も居るということだ、聞いて来い」

リクオが会話に加わりに言った、そして藤次は雪女を落ち着かせる事を始めた

「ほら、怖くな～い怖くな～い、ばれなきゃ平気だから落ち着けよ～」

頭を撫でながら、子供に言い聞かせるように、ゆっくり話しかけていく。

「うぅ～！うぅ～！」

恐怖の余りに、顔を藤次の胸に埋め、顔を左右に振り続ける。
藤次はその様子に、和みながら、静かに頭を撫で続けていた。

「役得、役得」

「ど、如何したの、カナちゃん？顔色悪いよ……？」

「リクオくん、あんなにはっきりおばけ見えちゃったら、普通落ち

込むでしょ？」

清継宅を後にした彼らは半数が落ち込んでいた。
氷麗はあれから完全に沈み、藤次と手を繋いでいたりする、後数分もすれば元通りだろうが……

「そんなに嫌なら清十字団、入らなきゃいいのに……」

「何だそれ？」

「ああ、清継君が始めたクラブみたいな物だよ」

「そんな事より若〜〜、何であんな約束しちゃったんですか？」

元に戻った氷麗が不機嫌にリクオに尋ねた。
まぁ、機嫌が悪くなるのもわかる気がするな、なんせ……

「日曜日、清十字怪奇探偵団、ぬら組本家に集合って！」

「そうだな、今回は俺も賛同しかねるな。もし万が一ばれたら、封じられるか、殺される訳だからな。ばれなければ今後は安全かもしれないが……」

「うっ！大丈夫だよ……多分。あんな感じに目立たなければ……ん？」

「お、おい、見ろよ。すげぇぞ、今時暴走族かよ……」

バイクの騒音が、気になりそちらを向いてみたら、何台ものバイクが止まっており、誰かを下ろした

「って、青じゃねぇか……それにあいつ等」

「あ、若に藤次殿、お勤めごくろーさんです」

青田坊が此方に気付き、頭を下げてきた。
藤次はバイクに掲げられた旗にある血畏夢百鬼夜行（チームひゃっきやこう）の文字にも見覚えがあった

「おいっ！テメェ等総長と朱天さんに挨拶だ！！」

『『『『おつかれっしたぁ！！』』』』

その後騒音を撒き散らしながら、蛇交運転で帰っていった

「人間に頼まれたんで、ちょっと出入りしてきました妖怪ってばれない様に目立たず頑張りました～」

「また、あいつ等とつるんでたのか。青、程ほどにしろよ……」

以前、青田坊と共にシメてからと言うもの、会うとあのように挨拶していく。
青田坊にもあいつ等にも悪気は無いのだろうが、完全に悪い意味で目立っている。
リクオもドン引きしていた……

更に帰ってから朝の宴会が続いており、リクオが遂に切れた事は言うまでも無い……
その宴会にちゃっかり、最後混じった藤次だった

朝日が奴良組を照らす。

「なぁーにこんな床でだらーっと寝てぇ」

毛倡妓が床で酔いつぶれている首無に語りかけていた。

「うぅ……気持ち悪い。二日酔いだ……」

「情けないのねぇ、納豆や黒田坊にも負けてひとりで潰れちゃってさ」

「なんだい？オレの事呼んだかい？」

納豆小僧が名を呼ばれたことに反応して姿を見せる

「ああ、誰が一番酒に強いかって話。弱いのは首無で決まりだけどね」

「う～ん、酒ならやっぱり青田坊じゃ～ないですか？昨日の宴会には居なかったけど奴の酒豪っぷりは尋常じゃねぇぜ？」

「青が一番？ふっ、昨日最後まで飲んでたのはこの私だ」

コタツの中から突如黒田坊が出現した

「そーだっけ？」

「いや～どうだっけ？確かに最後まで居たけど食ってばっかりだった様な……」

「ギクッ！」

「いやでも、黒田坊の周りがやたら酒の減りが早かった。つまり隣で飲んでた奴が一番の酒豪……」

「「「……」」」

「あたしか」

「ハハッ毛倡妓姐さんには――――」

「おいっ！誰だよ！酒蔵に残ってた三つの樽全部飲み干した奴！」

酒蔵を管理する妖怪が怒鳴り込んできた

「「「……」」」

「あたしじゃないわよ！？」

「あ、そういえば藤次殿が酒蔵に行くのを見た気が……」

「「「「奴かっ！」」」」

「今日も学校行ってるんだろ？タフだね……」

～第漆幕～（後書き）

最後の部分はどうしても書きたかったから書きました。
酒呑童子の息子と言う設定ですので、酒には強いだろうと……

～第捌幕～（前書き）

更新です！

関係ないけど、アニメの巻と鳥居が完全に可笑しなキャラに成ってるのは気のせいか？可笑しな踊りしてたからつい笑ってしまったんだが……

いや陰陽道とかのポーズなのは理解してるんだが、ね？

～第捌幕～

「だから若……なんでワシらがそんなコソコソせにゃならんのです！」

「事情は解るけど、頼むよ……君らの為でもあるんだ」

リクオは、家に居る妖怪達と揉めている。
この後来る清継、島、家長、花開院の四名を迎えるために交渉しているが、そこはやはり妖怪、人間相手に隠れる事を嫌っている。

「そいつ等が何者だっちゅーんですか！」

遂に声高に叫びだす者まで出てくる始末。

「陰陽師の末裔……」

リクオから出てきた言葉にその場の者達の動きが止まった。
それと同時に呼び鈴が鳴り響く。

「さ、ささささ～～てトットト隠れるぞ～！！」

先頭の妖怪がそう言うと、皆まるでクモの子を散らすようにそそくさとどこかに行ってしまった。

「そいじゃなリクオ、俺は出かけてくるからくれぐれもばれん様にな」

「って行っちゃうの！？」

「悪い、この後用事があるんだ」

清十字のメンバーと入れ替わるようにして家から出る。
その時清継がなにやら文句を言っていたが、鳥居と巻も居ないのだから今更一人くらい居なくてもいいと思う。

「こんちわ～っす、良太猫居るかい？」

「ああ、藤次さんでしたか、お待ちしてました……」

一番街の良太猫が経営している酒場に訪れていた。
そこで頼んでいた酒を取りに来たのだが、なぜか店の雰囲気が悪い。

「頼んでた酒を取りに来たんだが……何かあったのか？」

「申し訳ございません、酒を仕入れてる家（うち）の者が……途中でやられました……」

良太猫が最近の一番街について語った。
最近、旧鼠組（きゅうそぐみ）と言う奴らが、荒し回っているらしい。
頻繁にではないが此処に足を運んでいたが、そんな奴らの事は気付かなかった。

「これから、総大将のところにお邪魔して、この事を伝える積りです」

「あ～そいつは日が沈むのを待ったほうが良いぞ？リクオが切れる……」

「解りました、それで如何されますか？酒はご用意できませんでしたが……」

「別の所行くから気にしないでくれ、自業自得だしな」

藤次は良太猫の店を出て次に行く場所を考えていた。
何故酒を探して回っているかと言うと、宴会の時に三樽も飲んでしまったのがばれてしまい、足りない分を買いに回されているのであった。

「狒々さんとこ行くかね。あの人（？）爺ちゃんと趣味が合うから、きっと酒も家と同じのがあるはず。今から行くと日が沈む頃には帰ってこれるかな……」

「……何だ、お前ら？」

夜のネオンが輝く街、その裏通りを酒樽を一つ担ぎ歩いていた。
帰りに近道なので一番街を通ったところ、血の匂いがするホスト風の男達に囲まれた。

「アンタ、三代目と何時も一緒に居る奴だろ？旧鼠様がアンタを捕まえろってさ」

「旧鼠……なるほどネズミか、道理で血の匂いが濃い訳だ。それにしても何でまた俺を狙う？」

周りの人数を確認するように首を左右に振る。

（……八匹、それほど強く力も感じないし、雑魚か……）

「アンタだけじゃねぇさ、三代目の知り合いの女を二人捕まえてる。式神とか出された時は焦ったけどな、後はアンタを捕らえたら餌の準備は完成さ」

その一言で、藤次の空気が変わる。
女二人、式神と言う事は一人はゆら、もう一人は恐らく今日一緒にリクオの家に来ていたカナだろう

「……あん？捕まえた？リクオの知り合い？テメェら……」

その姿が変わり始めた、赤毛が伸び、２本の角が頭から覗く。
穏便に殺さず追い払う、と考えていたが、捕まっているのが友達であるカナと、知り合ったばかりで陰陽師だが友達だと藤次が勝手に思っているゆらだ。

「……殺すぞ？跡形も残さず……」

怒り心頭、周りの温度が上がり始めた。

「は、はんっ！強がるのもいい加減しろよ！虚仮威(こけおど)しで姿を変えた所でこっちには人質が居るんだよ！俺たちが帰って報告すればそいつらの命は……」

男達のリーダーらしき男が額から汗を流し、脅しをかけるが

「言っただろ……跡形も残さないって……此処から帰れると思うなよ……？」

当時の姿が蜃気楼のように霞み、旧鼠妖怪達は身体から汗が流れ続ける、それは冷や汗でもなんでもなく、周囲の温度が上がり続け手居るからだ。

「何だ……？この馬鹿みたいな熱は？」

「気にするな……これから死ぬお前達には必要ない情報だ……《鬼(は)撥(つ)」

藤次の身体から火の手が上がる。

「ぎゃあぁぁぁーーー！？」

その火はまるで意識があるかのように、藤次を囲むようにしていた男達を焼き始める。

「消火鬼（しょうかき）》」

男達は断末魔の悲鳴を上げながら火達磨になっていたが声が聞こえなくなり、彼らを焼いていた火は数分して収まり、後に残されたのは藤次と灰の山だけだった。

「悪いな、武器が無かったから苦しむ時間が延びちまったな」

風に乗って灰が舞う。
その灰を目で追いながら満月を見上げてた。

「ネズミ狩りだ……」

表通りに出たところで後ろから声が掛かる。

「藤次、ご機嫌じゃねぇか」

「そう言うお前も僕を引き連れて、久しぶりの出入りか？」

「そういう事だ、それよりお前熱いな……」

何時も通りリクオの隣を歩こうとするが、自身の温度を思い出し少し距離を取る。

「ああ～！藤次さん！探してたんですよ！？何処に行って……って熱いぃーー！！」

「余り近づきすぎるなよ、溶けちまうぞ？俺の傍に居るのは氷麗が一番辛いだろ？」

身体の余熱が軽く百℃を超えているため、氷麗は近づく事も碌に出

来ない。

「え～い！冷まします！フゥーッ！」

「ああ～、いい風……」

「バカやってねぇで行くぞ？」

酒樽を担いだまま、リクオの隣に立ち、おどろおどろしい集団の先頭を歩く

～第捌幕～（後書き）

すんません、ネーミングセンス無いですね。
火鬼て言う名前「火　鬼」で調べたら将棋とかでたから使いたかったんだけど、何故かこうなった……消火鬼

～第玖幕～（前書き）

更新です！

お金がない……地味に困った。

ＤＶＤが買えない……

～第玖幕～

「あ、ところで藤次さん、藤次さんの得物ですが運んで――――」

「お！持って来てくれたのか」

「来ようとしたのですが、重くて私じゃ持てなかったんです」

「期待させたお前なんか嫌いだ……」

「青田坊に持ってくるように言ったから取りに行ったらどうですか？」

「気の利く君が大好きだ！……あれ、青は？何時も通りならリクオの近くに居るだろう？」

「あのね……あんな出鱈目な物持ってきてたら、いくら青田坊でも歩みが遅くなります」

「……そうか、とりあえず行って来ます！」

目的地目前で氷麗に自分の得物がある事を知った藤次は一目散に駆けて行く

「やれやれ、アイツはこんな所だけ子供だな……」

リクオはその様子を微笑ましく眺めていた

「そこがあの人のいい所でもあるんですよ?」

「それは知ってるが……雪女、お前楽しそうじゃねぇか」

雪女氷麗の顔は走り去った藤次を追い、笑みを湛えていた。

「えっ!そ、そうですか?そんな事無いと思いますけど……」

「お〜〜い!ただいま〜!」

藤次は満面の笑みを浮かべながら、ドシドシと音を立て走ってきた。その肩に担がれた得物が彼の武器になるのだが、長さは二メートルを超え太さなど藤次自身の肩幅ほど有り、どれほど巨大か解るだろう。

「いや～これ使うのも久しぶりだな。やっぱり鬼には金棒でしょ！」

片手で円を描くように振り回し、辺りに風を起こさせている。

「いい加減にしとけよ。……そろそろだがお前は如何する？カナちゃん達を助けに行くか？」

「俺はパスだ、変化してても顔は変わってないからな、バレる」

「解ったよ、ならお前はあっちの方を片付けたら如何だ、暴れてぇんだろ？」

それを了承してリクオが指した方に居るねずみを狩る事にした。

「アイツ……態と此処を指したんじゃねぇだろうな……」

旧鼠組と戦いが始まり、藤次も暴れ始めたかったのだが、確実に周りとレベルの違う敵が目の前にいた。

「相性最悪……」

全長は三メートル、ずんぐりむっくりの身体を震わせている大きな鼠、そう鼠なのだ。
間違いなく目の前に居るのは鼠で旧鼠組に居る事も多少理解できるのだが

「何故に火鼠が……居るのは中国地方じゃなかったけか、しかもなんか好戦的……」

この地域に居るはずの無い妖怪だった。
知性も無いのか、その細く堅い毛に覆われた身体で突進してきた。

「ま、関係ないか……でも此処でやる訳にも行かんしな。場所は変えさせてもらうぜ！」

「なら我らもお供を！」

「いらねぇよ、それじゃ巻き込んじまうし、俺に僕は居ない。あらよっとっ！」

その突進に合わせて、フルスイングを当てて遠くに飛ばす。

「それとリクオに言っとけ。……天空は紅く染まるってな……」

それだけ言うと藤次は飛び立っていった。

「藤次が、そう言ったのか？」

「はぁ、我らには何の事だか解らんかったんですがとりあえずお伝えしておかねばと……」

「解った、行っていいぜ」

藤次からの伝言を届けた妖怪を下がらせ、自分もまたこの混戦に目

を向ける

「とりあえず、雪女と火に弱い奴らを逃がさねぇとな。たく世話掛けさせやがって……」

「お前に見せてやるよ……俺の本気って奴を！」

赤い髪は逆立ち始め、次第に立っている場所がドロドロと溶け始めた。

「はっは！久しぶりにこの熱を感じるなぁ……おい、如何だ？気持ちいいだろ、お前もこの熱が心地良いんだろ？殴り殺すのが一番早いんだが、最近本気になって無くてストレスが溜まってんだ」

その顔は鬼らしく、とても残忍でそれでいて何処か幼い子供のようにも見える。

「何処まで耐えられるか、試してやるよ！……消火鬼・大蛇（おろち）！」

藤次の掛け声と共に噴出した炎が蛇のように地を駆け、火鼠に絡み付いた。

「キシャァーー！」

それも身体を犬のように振るわせてかき消してしまった。
そのまま身体を丸めて毛が硬質化し転がりながら接近してきた。

「っと！？お前は針鼠か！？」

地面に穴と焦げ目を付けながら、回転し続けている。

「たく、止まれってのっ！」

地面に自らの得物を突き刺し、その回転に真っ向からぶつかり、やがてその回転は止まった。

「此処からが本番だ……出番だ鬼闇棒（きえんぼう）」

地面を貫いている得物を肩に担ぎなおし、力強く震脚をした。

「鬼憑（ひょうい）……」

肩の金棒だけでなく全身に火を纏いだし、その火が天まで上りだした。

「鬼鬼怪界（ききかいかい）……」

まるで世界そのものが変わってしまったかのように辺りの景色が紅く燃え上がっていた。
その中で白く光を放つ物があった。
藤次の持つ鬼閻棒だ、藤次自身も青くその姿が燃え続けている。

「場死鬼破（じょうしきやぶ）り！」

振り下ろされた金棒は周りの物を溶かしながら、火鼠に命中した。

「グギャアァァーー！？」

火に強いはずの火鼠がその熱に耐え切れず、絶叫を上げ、その場で

身体が焼かれていく。

「はっは！焼きつくせやぁー！」

火鼠の断末魔はやがて聞こえなくなり、押し付けていた金棒を上げると、そこに有ったのは無残に焼かれた火鼠とその熱に耐え切った皮だけだった。

「こいつぁ凄ぇな、これに耐え切るのかこいつの皮は……中身が伴わなかったみたいだが」

見事に皮だけになったそれを持ち上げて、考えていた。

「これを服にして氷麗に送れば多少は熱に強くなるかな？」

毎回、氷麗の作る料理を自分だけ勝手に温まって食べているので、他の人間にも暖かい氷麗の料理を食べてもらいたい物だが……

「……っと、あっちも終わったか？」

ギリギリ見える位置で大きな鼠が青い炎に焼かれてるのが見えた。恐らく、リクオの明鏡止水・桜によるものだろうと思う。

「とりあえず、これにて一件落着。良太猫にこれ如何にか出来るか聞いてみるか……」

皮を適当に小さく畳んで、何時の間にか暗い夜に戻っていたその町を後にした。

～第玖幕～（後書き）

ごめんなさい！ワンピみたいに当て字ばっかの技ですね。

何かありましたら感想まで！

～第拾幕～（前書き）

更新しました！

十話ですねぇ～漢数字の書き方が面倒になって来ましたよ。

どうしましょ

～第拾幕～

「”回状を廻せ”と言う指示は破門した組の者が言っても何の意味も無い。恐らく旧鼠は誰かに飼われていたんでしょうな」

旧鼠の事があった翌日、緊急の会議が開かれ、物議を醸していた。その場には藤次も参加しており、ぬらりひょんの右側に座り、腕を組んでいた。
リクオは風邪を引き居なかったが、藤次にはどうしても気になる事があった。

会議がひと段落つき、雑談に興じる者が増えた中、藤次はぬらりひょんに呼ばれ、隣にいく。

「何だよ爺ちゃん……」

「お前、旧鼠に通じていた奴の事知っとるんじゃ無いだろうな」

「……何でだよ」

「お前は親に似て鼻が利く。カラス天狗に調べさせるが、知っているなら早い方がいいじゃろ」

この場合、鼻とは嗅覚と言う意味ではないのだが、あながちハズレではない。

「何で俺が隠さなきゃならん。リクオに危害を加えた奴は許さない、それが俺のあり方だ。まぁそれと同時にリクオの成長に期待する一人でもあるけどな」

「そうか、それならええんじゃ」

その場を後にする藤次は部屋を出る前に牛鬼の方を盗み見た。

「たく、疲れた……」

リクオの様子を見に向っていると、突然リクオの部屋から食器の割れる音が聞こえてきた。
急ぎ、部屋に向うと氷麗と清十字のメンバーが向き合っており、氷麗から若干の冷気が漏れていた。

「ご苦労さん、氷麗。他のメンバーも来てくれたのか」

何事も無いように話しかけ、この何とも言えない空気をかき消した。

「あ、あれ？藤次君、何でここに居るの？」

「カナ、お前こそ何言ってるんだ。此処は俺の家でもあるんだぞ？因みにコイツは俺が連れてきた」

隣に立つ氷麗を抱き寄せ、アピールする。
何故か島が絶望の顔を浮べていたが、疑われない様にする為にこの際気にしていられない。

（ちょ！？ちょちょちょっと！何するんですか！）

（しかたねぇだろ、合わせろ……）

顔が赤くなる氷麗は貴重で眼福物である、これもまた役得だ。

「さあて！看病はさておき！ゴールデンウィークの予定を発表する！」

パソコンを取り出し、映っている物を見せ付ける清継。

「僕が以前からコンタクトを取っていた妖怪博士に会いに行く！場所は僕の別荘も有る捩眼山！」

藤次の眉がつり上がる。

「今も妖怪伝説が数多く残るかの地で妖怪修行だ！」

「おい、牛鬼……」

牛鬼が総会を終えての帰路の道で、藤次は話しかけた。

「これは、藤次殿。私に何か……？」

「思慮深いお前なら俺が何のために来たか解るだろうと思うが」

「……」

「お前から匂うんだよ……あの溝鼠が喰らってた物と同じ匂いが……」

「流石に、血の匂いには敏感だな……」

牛鬼は悪びれる事もせず、正面から向き直る。

「ならば如何する？総大将に知らせるか？」

「しねぇよ、お前が何を考えているか……何となく解る積りだ」

「解る、だと？……お前に何が解る！？あの地で内からも外からも崩れていくのを、まざまざと見せ続けられていく私の気持ちがお前にわかるか！？」

もはやばれているのなら隠す必要の無い牛鬼は己の感情を吐露し続ける。

「だから私は動いたのだ！私の愛した奴良組がこの様な形で壊れてしまうなど認められるか！」

それを俯きながら聞いている藤次はやがて肩を震わせる。

「……誰も……お前だけじゃねぇんだよ！」

牛鬼の胸倉を掴み、壁に押さえつける。

「お前だけが奴良組を思ってると勘違いしてんじゃねぇぞ！？俺の……俺の親父だってな」

藤次は涙を流しながら訴えた。

「お前と同じなんだよ……俺の親父は家族ってもんを……奴良組に……教えて貰ったんだよ……！」

嘗て父が語った奴良組に教えられた事。

『こんなに暖かい場所はわしは知らんかった』と何時も口癖のように語っていた。

「俺はリクオの味方だ。組の事は関係無い、と突っぱねるのは簡単だ。だが親父が大切に思う奴良組も見捨てる積りはねぇ。リクオには好きにしろって言ってるが継がせるぜ？俺は……」

牛鬼から手を離すと、その顔から涙は消え、代わりに牛鬼すらゾッとするような凶悪な物になっていた。

「いや、アイツは継ぐ事を半ば決めている。後は切欠だけ、お前の行動が逆に良い弾みになりそうだ……アイツも俺も、人間も妖怪も捨てられない……だから強くなるんだよ……」

笑っているのに笑っていない、矛盾を抱えたその表情は、人間の状態でありながら正しく鬼の眷族を思わせる。

「リクオを成長させるためにお前すら利用する。その上で俺は仲間を守り、敵を殺す。だから気にせず、お前が考えている事を実行すれば良い。今回の俺は傍観者だ止めないし否定もしない。ただ、お前もリクオも死なせない……」

「馬鹿な、言ってしまえばこれは謀反だ。成功しても失敗しても私は死ぬ」

「なら試すが良い、リクオと俺を舐めるなよ？……話はこれだけだ、また捩眼山で会おう」

藤次の後姿を牛鬼はただ見続けるだけだった。

「藤次さん！」

「……はい」

玄関先で藤次は氷麗に叱られていた。

「如何してこんな時間になってしまったんですか！今日は若菜様がお食事を作ってくださったんですよ！？それなのに冷めてしまったじゃないですか！」

「すみません……」

「今日だって突然抱きしめてきて……」

「それもすまん、嫌だったら今後一切しないから……」

「いえ、アレはアレで……はっ！そうではなく！」

なにやら身動ぎをした氷麗は顔を赤くしながら口早に話す。

「私が言いたいのはですね！何かをするなら必ず一声を掛けて欲しいって事です。あなたは何時も突然やり出すんですから困ります」

その後も説教は続き、疲れ切った藤次が一人、玄関先で発見された。

～第拾幕～（後書き）

そういえば、アニメ見て気付いたんですが黒田坊の鳥居ルートが消えてたよ。
電車での接触から袖モギで奮闘するのに如何するのか……

とりあえず、オリキャラを考えてます、藤次のライバル的な。
再現したいのはアレですよ
「カズマァァーーー！！」「リュウホゥォォーーー！！」
のシーン、オリキャラ刃物持たせたいな

わからない人は……早さが足りない！！

～第拾壱幕～（前書き）

更新しました！

アニメでこんなに早く総集編みたいなのをやるやつ始めてみた……

しかも四国妖怪の話の途中だよ。

～第拾壱幕～

「テメェ等！飛ばせ！！警察すら抜いて突き進め！」

《《《おうっ！！》》》

藤次は今、暴走族のバイクに跨り新幹線を追いかけていた。

「くそっ……あんな事さえなければ……」

昨夜、新しい家が完成するまでの間、本家に間借りしていた鳩に偶々出会った事がそもそもの始まりだ。

「おう、藤次じゃねぇか。丁度いい、ちょいとお前と話がしたかった所だ」

「良いけど明日の事があるから、手短に頼むぜ？」

そして話だと言われて鴆の部屋にお邪魔すると

「ぎゃあああぁぁぁぁぁーー！？」

「このバカが！確り火傷してんじゃねぇか！？どうして来なかった！」

布団に寝かせられた藤次は目に見えない部分に広がっていた火傷に傷薬を塗り込まれ悶絶した。

「テメェが全力で戦ったって聞いて心配してたらこの様だ！格下相手に全力出すテメェが悪い」

そう、藤次は自分の起こした火によって火傷していた。
藤次が耐えられる限界温度は白い炎までで、青白い炎になると火傷を負ってしまう、その威力が絶大な分、諸刃の刃と言える。
元々火に強い身体だからか治り掛けている所があるが、黒く焦げている部分もあり、見た目かなりグロテスクになっていた。

「昔から慣れてるから忘れてたんだよ……」

「こりゃ、明日出かけると聞いてたが、許可できねぇな」

「ちょ！？それは困る！あそこには一緒にいかねぇと！」

藤次が煩くなったので鴆はその傷口を叩いた。

「ーーーーーーーーーーーーー！？」

翻筋斗（もんどり）を打ち、声にならない声を上げた。

「そんな状態で行かせられるか、このまま寝てやがれ、藤次の回復速度ならもしかしたら、行ける様になるかも知れねぇぞ？」

そう言われてしまっては大人しくしているしかない。

しかしそうなっては、暇が憎い。こうして寝ているだけだと落ち着かない。

「誰か来ないかな……」

大人しくしている事が苦手な藤次は誰かが尋ねてくるのを切に願っていた。

「おう、藤次よ、大事無いか？」

「うわ、萎えた……」

「それはどういう意味じゃ！？」

最初に尋ねてきたのは総大将ぬらりひょん。
暇の筈が無いのに、恐らくぬらりくらりと逃げて来たに違いない。

「……お前さんが火傷を負ったと聞いてな、お前の親父もよくやっておった……」

昔を懐かしむように語る爺ちゃん、其れによると、親父はよく感極まった時などに炎上していたようだ。
それだけ嬉しい事などがあったのだろうが、周りからすれば良い迷惑である、傍に居るだけで生死の境に立たされているのだから。

「俺は感情に任せて燃えないぞ！？」

「いやいや、解らんぞ？お前さんは親父を尊敬して、実際似ておる部分も多々ある。ワシはいつ家が焼け落ちてしまうのか心配で心配で……」

燃えたのは一度や二度ではないらしい、この屋敷も何度か建て直したとか。
ここ数百年は無いが、爺ちゃんの世代の頃は一年に一回は建て替えるというバカらしい事があったらしい。

「ま、無事ならそれでええんじゃ、ワシはそろそろ戻る事にするよ」

「見舞いありがとよ、仕事がんばんな」

爺ちゃんが出て行ってから暫らく暇だったが戸を叩く音がした、誰かが見舞いに来たのだろう。
顔を出したのは納豆小僧だった。

「若旦那ご無事で？先日の出入りで怪我したとか……」

「大した事は……それより若旦那は止めないか？色々リクオと混ざる」

「そう言っても若旦那は旦那の息子ですからね。昔から知ってる好としては今更な気がして……」

「そういえばお前、長生きしてるんだったな」

幼い頃から悪戯の時に一緒に居たので、どうしても自分より長生きしているようには感じられないが、この納豆小僧は四百年より前からぬらりひょんに仕えている、所謂古株なのだ。

「そりゃもう、若旦那の父上には、顔の藁が少し燃やされましたよ、あの時は死ぬかと……」

（親父殿、俺はあんたを尊敬して良いのか解らなくなりそうです……）

それから暫らくしてから納豆も引き、来る人来る人、皆親父の話をしていく。
初代から仕えている者は皆「死ぬ事を覚悟した」といって帰っていき、二代目からの者はからかわれたり、悪戯をされたと言う者が多かった。
しかし

「皆笑ってたな……」

見舞いに来た者たちは皆一応に話しながら笑っていた。

「親父、やっぱりあんたの事尊敬するよ……そんなアンタが愛したこの奴良組をやっぱ無くすわけにはいかねぇよな……」

「藤次さん、大丈夫ですか！？」

考えに浸っていたら、戸をこじ開けるように氷麗が入って来た。

「あの時言ってくれれば冷やして応急処置できたのに！」

確かに冷やせれば助かるが、あの時の藤次の体温は優に1千℃は軽く超えていた。
そんな人間の傍に雪女が近づけるかといえば、答えはＮＯだ。

「出来るわけ無いだろ、お前を傷付けたくない……下手をすれば死ぬぞ？」

「うっ、そりゃ実際あの時、空が赤くなった時暑さにやられて逃げてましたけど、踏ん張ればそれぐらい……」

「いいよ、そんなに気に病むな。コレは自業自得だ」

「そうだ！今からでも冷やせばきっと！」

「……は？」

「フゥ〜〜！」

氷麗の冷気によって身体全体が氷付けになり固まった。

「ああ！すみません！」

慌てた氷麗はその氷を砕こうと、手直にあった物で叩いた、そう傷口の上を……

（がっ！？ぐふっ！？し、死ぬ！氷麗！？ヤメ……）

余りの激痛に気絶をした藤次はその後、様子を見に来たリクオが氷麗を止め、鴆を呼ぶまで絶え間なく続く振動によって、生死の境を行ったり着たりしていた。

「……あの後気が付いたら傷は消えてたが、リクオ達が出発した後だったなんて」

今日、起きてその事を知った藤次は鴆に許可を貰い外出、青田坊を連れ暴走族たちを集結させ、今こうしてバイクを爆走させていた。

「牛鬼！それもコレもお前の所為じゃぁーー！！」

完全な八つ当たりである。

～第拾壱幕～（後書き）

如何だったでしょうか？

次回は何とか合流させたいが、この流れで出来るか……？
そしてまだ先だが、遠野に行くところ如何しようか考えてます。
先に京都に行くか、それともリクオと一緒に村に訪れるか。
アンケートです、四国を終わらせないとどうしようもないのですが、
締め切るのは四国編が終わるまでです。
気が早いと怒らないで下さい……

～第拾弐幕～（前書き）

更新です！

今回は難産しました……

何で別れて行動させたりしたんだろう、合流が思いっきり強引です

……

～第拾弐幕～

「着いたか！それじゃ俺は此処で降りるから、青田坊はあっちを頼む」

「解りやした、それでは藤次殿失礼しやす」

捩眼山の麓(ふもと)で青田坊率いる暴走族と別れ山の中に入る藤次。

「随分古い妖怪の爪だな……」

木々に突き刺さる馬鹿でかい爪、そして幾つかの祠。

「道が幾つかに分かれてたから、真っ直ぐ道なき道を進んできたが……」

詳しい道程を知らなかった為に、森を分け入って進んでいく。
そして、山の中腹に差し掛かったところで、何処からともなく血の香りがしてきた。

「血の香り……？……こっちか！」

本当に微かな物だが、其れを嗅ぎ分けてこの森の中で真っ直ぐに目的の場所に向う。
誰の物かは離れている様でこの距離では解らない、しかし今この山に居るのは清十字のメンバーだけだ。

「絶対助ける！」

この距離で匂うと言う事は、結構な傷なのは間違いない、其れが解るだけに走りながら変化をし、全力で走り抜ける。

「私が……私が若を守らないといけないのに……」

牛鬼様の身内だと思って油断した。
突然、足を刺され、動きが鈍った所を追い討ちされた。
何とか致命傷は避けてきたけど、もう追い込まれてしまった。

「うっ！」

弾き飛ばされ転倒する。
そして止めを刺すために刀を振り上げてきた。

「死ねっ！」

「つららっ！？」

声のした方を見るとリクオ様が居た。

「若？」

ここに居ちゃいけない！

「逃げてぇー！若ぁー！！」

刀が振り下ろされる刹那、頭に浮かぶのは藤次さんの顔。
何時ものんびりとしながらも、リクオ様が大変な時は何時も居た頼れる人。
誰からも一目置かれる強い方。
でも、如何して……

「如何して私の時は居てくれないんですか……」

小さく、本当に小さくそんな言葉が漏れる。
それは自分の願望か、何時もあの人の中ではリクオ様が中心で、私は其れが羨ましかったのかも知れない。

「藤次さんの……バカ……」

刀が眼前に迫った。今更避けるすべはない、痛みが身を貫くのを待つ。

「悪かったな、遅くなってよ……」

「……え？」

しかしそんな痛みは来ないで、其れと変わる様に暖かいものが顔に掛かる。
目を開けた私は思わず目を瞬かせてしまった。
なぜなら目の前に腕を刺された藤次さんが居たんだから……

「お前は！？」

「いてぇ、な！」

腕に深く突き刺さった刀をそのままに、襲撃者に蹴りを入れる。

「ぐっ！？」

「何してやがる……お前、この女は奴良組若頭の……ボクの僕だ」

駆け寄ってきたリクオが二人を庇うように、前に出てきて護身刀を構えた。

「解っててやってんなら、オレはお前を切る！」

「リクオ……？お前混じってんな……」

言葉の端々でちぐはぐな喋り方をしている。

昼と夜、その境目の状態だ。

「チッ、数が増えたか……だが腑抜けの人間一人と動けない怪我人が二人、牛鬼組が人間風情に負けるはずがねぇんだ」

相手は刀を構えなおし、じりじりと距離を詰めてくる。

「牛鬼の手下か……」

「リクオ、お前は早くこの先に行け……こいつは俺がやる」

「……良いんだな？」

「当たり前だ、それに今回の件だってお前がのんびりしてる付がこうして来てんだ。当事者同士でさっさと話しつけてこい」

其れを聞いたリクオは戦いの場から離れ、牛鬼が待つ屋敷を目指す。

「行かせると――――」

「思ってるよ！」

リクオを襲おうとした敵の足を藤次が止める。

腕の傷は氷が塞いでいる。

「チッ、邪魔を！」

「するに決まってるだろうが、これは組の問題じゃねぇ、俺達の問題だ」

「しょうがない、貴様を片付けてから奴良リクオを始末する！」

「其れはこっちの台詞だ、俺は頭にきてるんだよ……貴様を始末して牛鬼の前に突き出してやるよ」

腕を固めていた氷が溶け出した。
藤次の我慢は限界に来ていた、こんなに傷だらけな氷麗を見て最初は怒りで森そのものを燃やしてしまう所だった。
其れを何とか押し込んでいたが、この開けた場所ならば多少の熱を出しても平気だろう。

「牛鬼様からは貴様が居たら手加減の必要は無いと言われている。この牛頭丸の爪で切り刻む！」

牛頭丸の背から八本の爪が伸びてきた。

「なるほど、道理で牛鬼が最も信頼する部下の割りに動きが鈍いと思った、手を抜くように言われていたか？」

「ふん、出来損ないの鬼が、知ったような口を！」

駆け込んでくる牛頭丸。
藤次は其れを正面から受け、刀を片手で掴み、八本の爪は残った腕と片足で受け止めた。
そして藤次が受け止めた刀はその原型を止める事が出来ず崩れ落ちる。

「俺の刀が……！？」

戸惑う牛頭丸の顔に、高熱が宿った拳を叩き込まれる。
当たり所が良かったのか、その一撃だけで牛頭丸は動けなくなった。

「丁度良い……このまま……何の積りだ、氷麗？」

「殺すお積りですか……？」

「そうだ、其処を退け。お前が俺の前に立つのは厳しいと何度言えば解る……」

足尾引き摺り、熱さで身体もだるいはずなのに牛頭丸の前に立ち、藤次の行動を制止する。

「退きません……この方には牛鬼様共々本家での処罰を受けてもらわなければなりません」

頑なに拒む氷麗、それに苛立ちを募らせる藤次。

「俺は……！そいつが許せねぇ……お前をこんなにして、コイツだけは！」

膨大な熱量を持ったまま、牛頭丸に詰寄ろうとする藤次、しかし

「ダメです！私のことを心配してくださるのは嬉しいですが、それだけはダメです！」

何と氷麗が抱き付き止めたのである。
其れは氷麗にとって死に近付く危険な行動だ。

「――――！？や、止めろ！離れろよ死んじまうぞ！」

「大丈夫ですよ……やっとこの姿の貴方に触れる事が出来ました……頂いたこの皮衣のお蔭ですね、ふふふ……」

それだけ言って気絶してしまった。
流石にこの熱に当てられ続けるのは、無理があったか。

「お前の顔を立てて、もうやらねぇよ、このバカ……心配させるな……」

変化が解けて、煙を上げながら優しく氷麗を抱き締めた。

～第拾弐幕～（後書き）

如何だったでしょうか？
楽しんでいただけたのであれば幸いです。

ところでアニメを見て思ったのだが、焼き鳥になるだけだったアノ四国の火の鳥さんが悪事をして活躍してたよ。
よかったね！妖怪大鳳凰さん！

～第拾参幕～（前書き）

更新です！

またアニメの話から始まりますけど、四国妖怪を一人ずつピックアップして作るみたいだ。

面白いけど、どんどん原作とかけ離れて行く気がするなぁ

～第拾参幕～

「ん？おう、カナじゃないか、丁度良かった」

藤次は霧深い森の中で氷麗を抱えて階段を下りていた途中、カナと遭遇する。

「藤次君！？どうして此処に？ううん、それより此処に来るまでの間に人を見なかった！？」

半ば興奮状態のカナを落ち着かせ、話を聞く。
どうやらリクオが変化してこの階段を登って行った様だ。

「そうか、なら俺が確認してきてやるよ、もう暗くて危ないから先にコイツを連れて別荘に戻ってろよ」

気絶している氷麗をカナに渡し階段を登っていく。
捲くし立てる様に言われた事でカナは藤次の背を見てる事しか出来なかった。

「う～～ん、ほらこんなに近づけてますよ～……」

「私じゃ運べないよ……起きるまで動けない……」

氷麗の寝言を聞きながら、藤次に恨み言を連ねていった。

「だが死ぬこたぁねぇよ……こんな事で……なぁ？」

藤次が駆けつけた頃には全てが終わっていた。

牛鬼と対峙したリクオは器と意志を示し、牛鬼に認めさせた。

「如何だ、言いたい事は言ったか？」

血に塗れて倒れている牛鬼に語り掛ける。

「ああ、お前が言った通り、死なせてはもらえなかった。私はリクオを侮(あなど)っていた様、だ……」

少しだけ笑みを浮かべながら、牛鬼は倒れた。

「しょうがねぇな……」

倒れた牛鬼を背負って屋敷の中を歩いていく。

「白んで来たな……」

外は霧が晴れて、太陽が顔を覗かせていた。

「百鬼が家族、か……俺も家族を……」

牛鬼が今回の騒動を起こした原因の一端を担う理由。
その事を藤次は深く頭の中で考えていた。

事件の後、リクオは牛鬼と和解。
そして今回の事件が、自分の責任もあると自覚したリクオは以前より考えていた通り、三代目襲名に向けて昼、夜関係なく覚悟を決めた。

そして、本家に戻った俺はと言うと

「あ〜〜ん！」

「ほらよ……」

学校を休み、氷麗の看病をしていた。
何故看病をしているか言うと、氷麗の牛頭丸にやられた切傷は大した事は無く、妖怪らしく治りが早かったのだが、弱点である火による物は治りが追いつかず、かなり衰弱していた。
つまり、藤次が与えたものが一番の重症であり、それに責任を感じた藤次はこうして看病を名乗り出たのである。

「元気になったら何か買ってやるから、早く良くなれよ？」

「本当ですか！？それなら一緒に買い物に行きましょう！今すぐに！あいた！？」

「アホ、そんな状態のお前を連れて行けるか。大人しく寝てろ」

無理やり布団に押し込んで静かにさせる。
今居る部屋が過ごし易いから多少元気だが、この部屋を出ると忽ち（たちま）倒れてしまいそうだ。

この部屋は現在大きな氷が置かれ、クーラーをガンガンにかけ、扇風機で風を送ると言う徹底さ、もう少し温度が落ちると氷点下になりそうだ。

「復活です！さぁ行きましょう！」

なにやら元気一杯の氷麗。
外は暗くなってもう夜だ、リクオも帰っていないようで迎えに行きたいのだが、約束した手前反故にする訳にも行かず、家から出ることにした。
妖怪にとってこれからが本番の時間帯だ。

「本当にこれで良いのか？」

「はい、其れが良いんです」

氷麗に物を買うといったが、氷麗が指した物はハンカチだった、ぬの字のである。

「藤次さんには、もうこんな立派な着物を頂いてますから……」

自分を抱きしめるように着物を抱き、嬉しそうに笑った。
その着物は藤次が倒した火鼠の皮から出来ており、色は白で出来ている為、普段と変わらず気付かないかも知れないが、普段着ているものより丈夫に出来ている。

「そ、そうか、それなら一度良太猫に礼を言いに行かないとな、これの仕立てを手配してくれたのはあいつだからな」

「丁度良いじゃないですか、これからあそこに行ってお食事にしましょうよ」

機嫌が良いのか、普段なら言わないようなことを言う。
そのまま腕を引かれる様に、化猫屋に向かう事になった。

「いらっしゃいませぇー！妖怪和風隠食事処（ようかいわふうおしょくじどころ）『化猫屋』へようこそ！」

店員が出迎える活気に溢れた店内、その奥から良太猫が顔を出した。
氷麗には良太猫と話があると言い、先に店の奥に向って案内されて行った

「おう、良太猫。この間は助かったよ、急な仕事なのに完璧だったよ」

「こりゃどうも藤次さん！あんまり気にしないで下せぇ、ほんのお礼のようなモンですから。それにしても若だけでなく藤次さんも御出で下さるとは今日は何かあったんで？」

「リクオも？」

「へ？へぇ、先程もう御一方と来店されましたが……アチラです」

良太猫が指差す先には変化したリクオと何故か人間であるカナが居た。

「……見なかった事にしよう、俺には関係ない」

そして藤次も店の奥に入っていった。

「らからですれ～？わたふぃは～ヒック……きいてまふか～！」

「何故……こんな状況になったのか……」

氷麗泥酔状態である。
始めは少し飲むだけにする積りだったのだが、周りと話をしていて気が付いたら氷麗が浴びるように飲んでいた。

「もう帰った方が良いな……店員さんお願い」

「もう帰っちゃうんですか～しょうがないですね。それでは会計を……」

そして、帰るために会計をして帰ろうとしたのだが、何を思ったのか氷麗は会計を担当し、今まで近くで酌をしていた女性店員に威嚇をした。

「しゃっきからヒック、イチャイチャ、イチャイチャと……ちょうじしゃんはわたひのれす！」

おもむろにしがみ付いて、睨みつけたと思ったら、そのまま寝てしまった。

「お、おい！？聞き取れないし、こんな所で寝るなよな！……まったく嫌な事でもあったのかね」

藤次は氷麗を連れて歩いていった。

「気付かないのかなぁ」

「如何だろうな、初々しいけど、見てるこっちはドギマギだな。しかもお前、態と藤次さんにくっ付きに行っただろう？」

「だって、焼き餅して自棄酒する雪女ちゃんが可愛かったんだもん」

「まったく……」

化猫屋の一コマである。

～第拾参幕～（後書き）

雪女のキャラが崩壊を始めた……

如何してこうなったのだろうか？

いや、俺が雪女が好きだからに相違無い！

雪女ばんざい！氷麗万歳！

これ以降はこんなにキャラは崩壊しないと思う。多分……

～第拾肆幕～（前書き）

更新しました！

今更だけど、アニメの狒々様カッコエェ～

中間にあるサッカーの話は漫画の番外編からです。

今回の話はアニメの性格の狒々様を漫画通りの展開で書いてみました。

～第拾肆幕～

リクオが沈んでいる。
恐らく昨夜の化猫屋にカナを連れて行ったのが原因だろう。

「若は一体如何したんでしょうか？」

リクオの様子が可笑しいと気付いている氷麗だが、彼女も昨夜について覚えていない。
酒の呑みすぎで記憶が飛んでいるようだ。

「気にするような事じゃないと思うぞ？それに俺には関係ない」

「もう、またそうやって……」

リクオと距離を開けて歩いていると、カナがリクオに声を掛けていた。
暫らくすると、カナが顔を紅くして逃げるリクオを追っていった。

「二人の間に何があったの……？」

「青春だな……」

その日、浮世絵中学恒例の球技大会が行われていた。

「おい、とうとうあの四人が決勝でぶつかるらしいぜ!?」

「マジかよ!一年二組対一年三組の決勝かぁ!」

既に敗退したクラスの生徒が集まり、今から行われる決勝戦について熱く語っていた。

「あ、でもバランスが悪いな、二組にはあの三人が居る。幾ら清継でも三人相手じゃ……」

「ふふふっ、それがそうでもないんだな」

「如何言う事だ?」

「三組に欠員が出てな、その穴埋めに人数が余ってた二組から加わったんだ」

「もしかして！」

「そう！加わったのは朱天！あの鉄壁のキーパーだ！」

「うおぉぉ！今までの授業で失点僅か一点の朱天か！このカードは見逃すわけには行かないぜ！」

「ヤッベェー！超興奮してきた！」

間も無く開始される試合を見逃すものかと生徒達は駆けて行く。

そしてキックオフ。

「止めろ！潰せぇー！清継を潰せぇー！」

清継がグラウンドを走り抜けていく。

そして次から次へと選手達を抜いていく。

「無駄だよ、君らが足掻いても、僕を誰だと思ってる！」

「アッサリぬいたぁ～！流石、流石神から全てを与えられた男！」

「でも趣味が残念……」

「行くぞ！超絶アーリークロス！」

中学生が放つには綺麗過ぎる軌道を描いて、そのボールはゴール目掛けて飛んでいく。
だがそれをリクオがパスカットして、その俊足で速攻を仕掛ける。

「速い！流石五十メートルを五秒台で走る超神速！」

リクオは自分に付いていたマークを振り切り、ゴール直前で高速クロスを放つ。

「キーパー動かない！見逃した！？しかし合わせられるのか！？中学生があのクロスに！」

走ってくる人影、誰も間に合わないと思われていたクロスに余裕で間に合って見せた。

「いたぁー！日本代表島ぁー！」

サッカーの中学生日本代表である島が合わせてシュートをするが。

「あぁぁぁー！しかし、読んでいた！朱天は見事に読んで止めた！」

「清継！速攻だ行って来い！」

「ナイスだ朱天君！任せたまえ、僕が見事に決めて見せようじゃないか！」

その後もラリーのように続いて時間一杯までこの攻防は続いたのだった。

「凄いぞ、今年の一年は！……なのになのに」

「がんばり入道って面白くないかい？」

「良いよね、口から出てる鳥が」

「そっすねぇ～」

「だけどあれ、便所の妖怪だろ？」

試合終了後、妖怪談義で花を咲かせる四人を見た他の生徒は膝を付きショックを受けていた。

「何で妖怪の話ばっかしてんだ、おまえらぁー！」

平和な一コマ、だがその平和も、長く続くものではなかった。
そう、妖怪の世界では……

「如何したの藤次？」

「ん、狒々さんが来てないからよ、迎えに行ってくるよ」

「え？珍しいね、藤次が自分から組の事に関わってくるなんて……」

若頭襲名のための総会当日、幹部が一通り揃ったが、狒々だけがまだ来ていない事を知った藤次は自分から迎えに行く事にした。

「あの人が爺ちゃんの召集に応じない筈が無いからな、嫌な予感がする……」

狒々は爺ちゃんとの仲がとても良く、一緒に居るところを何度も見ている。
しかも最近、本家に訪れ、爺ちゃんとお茶を飲んでいた時もリクオの変わりように心を躍らせていたと、本人が語っていたのを聞いている。
その狒々が来ないのは大変な事があったのかもしれない。

「解った、頼んだよ藤次」

「そっちこそへまをするなよ、襲名の挨拶は覚えたのか？」

「大丈夫だよ、その辺は無くても覚えてる。問題は牛鬼の件だけだよ、そっちも多分平気さ」

「強気だな、だが其れ位じゃなきゃ務まらない、期待してるぞ」

そしてお互いの拳同士をぶつけ合い、その場を離れていった。

「ガグウウゥゥーー！！」

本家からの召集のため、家から出ようとした狒々だが、突然訪れた三人の妖怪に襲われた。
全盛期から早四百年、弱体化した百鬼夜行、弱りきった自身の身体。
彼には襲撃者を撃退するだけの力は無かった。

「う……ぅ、わ、ワシを誰だと思うとる……大妖怪狒々様じゃぞ……奴良組幹部の一人じゃぞぉー！」

それが唯の強がりである事など承知の上で、彼は自身が杯を交わした総大将の面子を守るためにも、強気な態度を崩す事はしなかった。

「雑魚は雑魚じゃ」

鋭い風、この毒の風に身体を刻まれながら狒々は唯一人残してしまう一人息子の事を思っていた。

（猩影（しょうえい）……すまぬ……）

狒々の死を確認した彼らは懐から紙を出して放り投げた。
其れは人に知られる狒々の姿に罰印を書かれた物だった。

「大幹部とは言えこの程度か……弱体化してるってのは本当みてぇだな」

「こりゃ一週間も掛かんねーんじゃね？」

「奴良組は今脆い、頭を失えばすぐに崩壊する」

頭という部分を強調して口にする。

「そう、奴良組の総大将ぬらりひょんは四国八十八鬼夜行が殺るよ」

～第拾肆幕～（後書き）

この後の展開で二つほど迷ってます。

一つ、猩影の敵討ちに関してです。
ムチを捕らえて猩影に引き渡して解消させるか、原作どおり達成させずに行くか。
捕らえた場合、藤次の配下っぽくなってしまいそう。

二つ目、このまま四国大戦に出るか、爺ちゃんと共に四国に遠征か。
四国大戦だと戦うのが犬鳳凰で四国遠征だとオリジナルキャラが出現します。

出来ればどちらか選んでください、期間は２５日までです。つまり一週間。
よろしくお願いします！

～第拾伍幕～（前書き）

やっと出来ました。
これからさらに忙しくなるので、更新速度は今まで以上に掛かるかもしれません。

まぁ、そんな事より本編どうぞ！

～第拾伍幕～

「親父……誰だよ……こんな事したの」

まだ夜が明けるより前の時間、狒々の息子猩影が膝を付き、父の亡骸を抱えていた。

「許さねぇ……親父をこんな目に合わせた奴らぁ！俺が同じ目に会わせなきゃ気がすまねぇ！！」

人の姿を保っていた猩影の姿が徐々に大きくなり妖怪の姿えと変貌を遂げた。

「血が……滾るか猩影？」

「若旦那……」

猩影が後ろを振り返ると、其処には赤々と燃え盛る炎の中で腕を組んでいる藤次の姿があった。
力を込めている訳ではないのにも拘らず、藤次の感情に呼応するかのようにその炎が渦を巻いている。

「手伝ってやるよ……敵討ち……」

藤次もこの現場を目にして言い様の無い憤りを覚えていた。

「うううぅ〜！」

登校途中の電車の中で氷麗は唸り声を上げていた。

「落ち着きなよ、つらら」

「でも若！藤次さんには護衛が一人も居ないんですよ！？朝から、いえ、昨日の夜から姿を見ていませんし心配で……」

若頭を襲名したリクオの周りには六人もの護衛を配置されていた、護衛が増えたのには理由がある。
奴良組の幹部狒々が、昨晩何者かによって殺害されたのだ。
そのため幹部に護衛を回したのだが、唯一人藤次にだけは護衛を回せなかった。

何故なら彼も昨晩から失踪していたのだ。

（無茶だけはしないでくれよ、藤次……）

リクオは藤次の性格を知っている。
そのため何をやっているかは何となく理解していた。
彼はアレで情に厚い、親しい者の死を黙って見ている筈が無いのだ。

その日の夕方、藤次は学校を休み、町を練り歩いていた。
狒々を狙ったという事は奴良組に対しての宣戦布告に等しい。
此方の構成妖怪については調べがついているのだろう。
藤次は其れを逆手に取り、自身を囮に誘き寄せ様としていたのだ。

「何で来ねぇ……しゃぁねぇ」

日は既に沈みかけ、辺りを赤く染め始めた。
昨晩から人気の無い場所を歩き続けているのに気配すらまったくしてこない。
そこで藤次は休憩する為に公園に向っていった。

「……そりゃぁ俺の所なんかに来る筈無いよな……」

公園で総大将ぬらりひょんが風を操る妖怪たちに襲われていた。
陰陽師ゆらと共に。

「如何言う組み合わせだ？まぁ良い割って入るか……この匂いは狒々の血だ……」

藤次の目は帽子を被ったリーダー格の相手に向けられた。
しかし、ここにはゆらが居る事に思い至った藤次は一先ず、一般人として強引に割り込む事にした。

「家の爺ちゃん何しとんじゃ！」

陣形を取っていたのでそのうちの一人にヤクザキックをかまし、ゆらの居る真ん中まで吹っ飛ばす。
それにより陣形が崩れ、ゆらが自由になった。

「な！？いや、今は其れより！禄存！」

禄存と呼ばれる鹿の姿を模している式神を呼び出し、その鹿が一人潰しそのままぬらりひょんを拾って飛び上がった。

「朱天君もどっか隠れとき！」

藤次は公園の端まで避難をして様子を見ることにした。
本当に危なくなったらいつでも飛びかかれるように身体は緊張を保っている。

「やっと足手まといがおらんなぁ……」

だが其れは杞憂に終わる。
彼女は式神を三体同時に呼び出したのだ、本来式神とは精神力を多大に消費する物だ。
其れを中学生という若さで複数出すという事はそれだけで凄まじい才能といえる。
それだけでも驚きなのに、彼女は更にもう一体の式神を呼び出した。

「式神改造人式一体！花開院流陰陽術！黄泉送りゆらＭＡＸ！！」

「「ゆら……ＭＡＸ……？」」

奇しくも、この場に居ないぬらりひょんと同じことを考えていた。
その名前は無いだろう、と。

「って、バカ!?まだ終わってないのに……!」

ゆらは、先程の一撃で倒したと勘違いして、警戒を緩めた。
案の定その隙を突かれ一撃を貰う。
遠巻きで何を話しているのか解らないが、どうやら爺ちゃんを追って行った様だ。
しかし、それを追おうとしている様だが動きが悪いゆら。

「大丈夫か?それとアイツは何なんだ?」

「朱天君……アイツは四国妖怪ムチ、風の妖怪でその風は猛毒を持つんや。はっ!そんな事よりはよ追わな!奴良君のお爺さんが危ない!お爺さんは私に任せて先帰っとき!」

式神を全てしまい、ビルを目指して駆け出した。

「……帰っておけと言われても、アイツに用事が有るんだよ。しかも早くしないと爺ちゃんが先に殺しちまいそうだな」

藤次の姿が徐々に変わってくる。
まだ完全な夜という訳でもないのに、妖怪へと姿を変えているのだ。

「くっはぁ～……はぁ、はぁ、しんどい……無理するといつもこうだ」

藤次は何時の間にか、自身の意志で妖怪化のＯＮ・ＯＦＦを自力で確立していた。
しかしそれは体力を必要以上消費するようで、緊急時以外には使用を避けているのだ。

「そんじゃま、ショートカットで急ぎますか？」

藤次は高く跳躍し飛び上がり、ビルに指をめり込ませ上っていく。

「ちょ！？ッと待て！まじいそがねぇと！」

上空から瓦礫が降っており、急がねば本当に目的を達成できない。
焦りながらも今出来る最高速で屋上に向う。

「くくく、ゾックゾクする……あんたみたいな大物をこの手でやれる日が来るとはよぉ」

ムチは風を起こしながらぬらりひょんに迫る。

「もう逃げ場はねぇ……我が八陣の渦に巻かれて塵となれぇ！！」

ムチが決まりとばかりに猛攻を仕掛けるが、ぬらりひょんはドスを懐から取り出し、それを唯無言で防ぐ。

「無駄だ！風は受け流せても、毒は体を蝕むぞ！」

ムチは威勢良く更に力を込めるが、ついにぬらりひょんがドスを抜き放つ、それと同時に自身の畏れをも発動させ、その認識をずらしその姿をムチの前から消した。
ムチはその余りにも大きな畏れに気圧されてしまい、小さく悲鳴に似た声を上げて眼を閉じて消えた瞬間すら捉えられなかった。
ぬらりひょんは、未だに混乱が抜けないムチに近付きその手に持つドスを振りぬいた。
しかし

「あぶねぇあぶねぇ、間に合わないかと思ったぜ……」

ドスの刃を藤次が寸での所で止めていた。

「む？藤次か、何じゃ今更……」

「わりぃな爺ちゃん。こいつの玉（いのち）は俺が預かる」

～第拾伍幕～（後書き）

場面転換が多くてちゃんと違和感なく書けているか心配です。
このあと猩影君が登場してムチを処理して部下に加わる、と言う流れになると思います！

ご指摘、感想何でも待ってます！よろしくお願いします！

～第拾陸幕～（前書き）

更新です。

最近寒くなってきて、コタツの中で書いてますｗｗ

～第拾陸幕～

「ひっ！？ひぃぃ！？」

逃げる、妖怪ムチはただひたすらに逃げていた。
後ろからまるで追い込むことを楽しむかのように、ゆっくりと、しかし確実に迫ってくる足音に怯えていた。

「く、くそッ！？何で、何で俺の風がッ！？」

必死に後ろからの敵に攻撃を放つが、それがまるで通じない。
まるで目の前で掻き消えているかのように避ける素振りすら見せない。
まして奴は片手で携帯を操作していた。

「どうした？もう逃げるのはお終いか？」

空に逃げても、何時の間にか炎が目の前に展開して、逃げ道を塞ぐ。
まるでどこかに追い込むように誘導されている気さえする。
そして……

「終着駅だ……」

何時の間にか目の前に現れて拳で思い切り殴られた。

「クソッ！八陣風壁！これで！」

「言っただろうが、此処がお前の終着駅だ。生き残れるかはお前の力次第……『消火鬼・八又の焔』」

藤次の背中から八本の炎が出現し、違う軌道を描きながら風壁八陣を吹き飛ばした。
このとき初めてムチは理解した。
自分の風が届かなかったわけ、副次的に生じた熱波によって掻き消えていたのだ。
意志を持って動かしていた風を一体どれくらいの熱があれば、強引に逸らせたのだろうか。

「お前の相手は俺じゃない、お前の後ろに居るやつだ。そいつを倒せればお前は自由にしてやっても良い」

ムチはその言葉につられて、後ろを振り返った。
すると、其処には見覚えのある能面を被った青年がいた。

「貴様か……親父を、俺の親父を殺したのは！？」

「親父？なるほど、お前あの雑魚だった大幹部の息子か」

ムチは救われた、そう思ってしまったのだ。
弱体化していた幹部の息子、これなら勝てると顔には笑みが浮かび上がる。

「てめぇも親父と同じ所に送ってやる！！」

「ウガァァァァァァァ！！」

戦いが始まった。

「血気盛んじゃのう……のう、童子よ」

壊れたビルの屋上で、総大将ぬらりひょんは去って行った藤次を見

てそんな事を口ずさんだ。

『コイツの玉は俺が預かる』

『コイツを殺したがってる奴が居る、奴良組の面子は敵の総大将を取れば良い』

殺したがっている者は、恐らく狒々の息子だろう。

「確か、猩影と言ったか……」

此方の世界には関わらないと人間に溶け込むらしいとは聞いていたのだが、父親の件から考え方が変わったのだろう。

「お爺ちゃん！ハアッハアッ！ヒィ！？ゼェーゼェー」

息を切らしたゆらが飛び込んできた。
下から必死で駆け上がってきたのだろう、余りの運動量に足がすこし震えている。

「あれ？あの男は？……」

「おお？あー……いや別に何も無いよ。うむ、奴は去って行ったよ」

「ホウ……」

少しして、ビルの端から何かに罅が入る音がしたと思ったら、途端にビルが崩れ始めた。

「ええぇぇ！ありえん！何も無かったとはとても思えん！幾らなんでも解るで！」

誰が見ても解るこの惨状を見て、流石に突込みを入れるゆら。

「いやいや、待て待て。ワシは隠れとったんじゃ、ワシが見付からんと焦れていた奴の下にもう一人火を使う奴が来よっての？そいつと一暴れしたらどっかに行ってしまったんじゃ」

咄嗟に地面に付いた焦げ後を指差して、この状況の原因をでっち上げた。

その後、ゆらと別れたぬらりひょんは納豆小僧と共にムチの出身の地である四国に足を向けた。

「これから如何なるかのぉ……」

若頭を襲名した事で、リクオにあまり心配していない。
しかし、先程会った藤次に少し考える物が残ったのだ。

「未熟と言うわけではないが……何か悩んでおる様な目をしておったな……」

「これで終いだッ！」

猩影は妖怪化した事により、大きく膨れ上がった腕でムチの腹を貫いた。
身体が傷だらけながらも、その顔には仇が討てた事への充実感があり、目から涙が流れていた。

「親父……仇はとったぜ……」

「気は済んだか？」

そこには、先程と変わらない位置に藤次が立っていた。
轟々と燃え盛る炎を背負い、逃げる者を許さない炎壁を今まで造っていた。

「はい……お蔭で胸の憤りが少し治まりやした……」

そこまで話して猩影は藤次をじっと見つめた。
屋敷で会った時には感じていた虞という物が今は感じなく、今は何かを考えているように静まっている。
あの時『手伝ってやるよ』と言われた時は恐ろしいまでの威圧感が圧し掛かったのが嘘のようだった。

「若旦那……俺をあんたの僕にしてくれねぇか？」

意を決して願い出た。
それは何も敵討ちを手伝ってもらったからと言うだけではない。
過去、偉大であった父の下で幾つもの妖怪を見てきたはずの自分が圧倒的な恐怖を感じ虞を抱いた。
ぬらりひょん様に会ってもこのようには感じなかったのにである。
これが父の言っていた「敵わぬ」と思わせるものなのだろう。

「悪いが俺は僕を……持つ気はないんだ。それならリクオの所に行ってくれ」

藤次は「僕」と言う部分を言い淀む様に口にして否定をした。

「いや、俺はアンタに……アンタと言う妖怪に惚れたんだ！」

（悪いな、親父……）

父が言っていた”次期総大将になるリクオ様に着いて行くかどうかは、次代のお前が決めればよい”
だから猩影は決めた、この方の後ろに並ぶと。

「アンタなら……いや、旦那なら！百鬼を作る事だって夢じゃない！だから俺と、七分三分の杯を！」

「俺の……百鬼夜行……」

藤次は悩んでいた、リクオと並ぶ、それが自分たちが対等であると言う証だと思っていたからだ。
しかし、それは本当に対等な物だろうか？
後ろに控える僕は全てリクオに着いて行く、自分は横で歩くだけ、藤次はその事でずっと悩んでいたのだ。

「二つの百鬼が並ぶ、か……それは面白そうだな……」

それが一つの答えだった。

「先ずは爺ちゃんに話してあの屋敷から出る所からだな。……猩影、着いてくるか？」

「は、はい！旦那の行く所なら何処へでも！」

新たな百鬼の誕生の瞬間であった。

～第拾陸幕～（後書き）

如何でしたでしょうか？
書き方はたまに変わります、練習と言うか、実験的に。

ご指摘、感想待ってます！

溜ってたアニメを鑑賞、そして驚いた！アニメで犬鳳凰がアッサリ死んでしまった！どうなっている、しかもやっぱり焼き鳥で終わる……悲しい人だ……

～第拾漆幕～（前書き）

更新しました。

話は進んでないですｗｗ

袖もぎ様如何しようかな？

～第拾漆幕～

「ちッ、今日はやたらと妖気があるな……」

ムチを始末し、帰路に着いていたが、途中で当たりに知らない気配が散発した。

「え？……ホントっすね、今まで感じなかったんだが……」

藤次の後ろにつき従う猩影が意識を集中してやっと感じられたほど遠くに、そして広範囲に散らばっていた。

「遠くで、炎が何かを焼く匂いに気が付いて、気になって探ってみたら気配を感じてな……丁度ある地点を中心に、円状に散らばっているから恐らくムチの居た組織だろう」

「と言う事は、親父の仇の仲間！……奴等まだ何かしようってんじゃないだろうな！」

組織だって動いている事は初めから予想はしていた、いや、その可能性以外には考え辛かった。
狒々を殺した事で、奴良組と言う大組織を相手にしなければならなくなるのだから、組織で無ければリスクが高すぎるのだ。

「それにしても、数が少ない気がするな……六……ムチを入れて七だから、四国で有名な七人同行と言った所か？」

飛び回り、大げさに動き回っている物だけを数えている為、中心の拠点に更に居るかも知れないが大きな力は拠点に一つあるだけなので余り関係なさそうだ。

「如何しますか、旦那？」

「……奴良組への最後の義理だ。この件が解決するまで加勢するぞ、猩影」

「へへっ、そう言うと思いやした！」

「とにかくリクオ達に合流しよう。これだけ派手に動いてたら、アイツも動くだろうしな」

雨が降り始める中、リクオを探して本家に向うのだった。

傘を持っておらず、猩影と共に濡れ鼠になりながら、本家に足を踏み入れる。

「あ、ああ、あああああぁぁぁ～！！やっと帰ってきたぁ！」

「やべぇ……」

玄関に入って出迎えたのは氷麗だった。
以前も何も言わずに出て行ったことで、こっ酷く怒られた事が頭を過ぎる。
しかも今日は一日以上も時間が開いてしまった。

「ちょっと！やべぇ、って何ですか！自覚があるんですね！？私がどれだけ心配したか……」

このまま説教が続くと思ったのだが、思わぬ人物によって長く続く事は無かった。

「あの……姐さん？つららの姐さんですよね？」

「へ？」

「お久しぶりです！猩影です！」

「あ、ああーー！うあぁ～立派になられて……でもこんな姿だったっけ？」

「ありのままの姿じゃ、大き過ぎますんで」

「そっか、でもどうして今日は……ってそれよりびしょ濡れ！？うわ！？藤次さんもびしょびしょ！話より先にお風呂に入ってきてください！」

そのままの勢いで二人して背中を押され、風呂場に押し込まれてしまった。
此処まで来たらしょうがない、と風呂に入り身体を洗ってから湯船に浸かる。

「……すまん、説教されずに助かった」

「いえ、懐かしかったのは本当のことっすから。……それにしてもリクオ様の事を聞けませんでしたね」

「そうだな、草履が無かったから外に出てると思うんだが……。それにしても爺ちゃんの草履も無かったのが気になるな」

玄関先で全ての履物を確認したが、ぬらりひょんの物が見付からなかった。
時間的に考えて、あの後から帰ってきていないのだろう。

「これじゃ、まだここに居続けなきゃならんだろうな……」

その後、静かに二人で湯船に浸かり続けているのだった。

「あ、待ってましたよ？さ、昨日はなんで帰ってこなかったのか、ゆっくり聞かせてもらいますからね？」

「なん、だと……」

出てくるのを待っていた氷麗に捕まり、此方が質問できない状態になってしまった。

「……そうですか、狒々様が亡くなられた知らせは聞いていましたが、無事に仇を討てたんですね……」

昨日からの出来事を氷麗に伝えた。

「はい、旦那のお蔭で親父もこれで浮かばれると思います」

「こっちの話は終わりだ。本家で何があったんだ？この静けさは普通じゃないだろ」

側近だけでなく、力のある妖怪は軒並み姿が見えない。
奴良組の中にはリクオの側近だけでなく数多くの実力者が居る、その彼らがやられると言う事は考えられない。

「ああ、そうでしたね、昨日から居ないのですから知らなくて当然でした」

氷麗はそこで言葉を切り、懐から紙を取り出した。

「今奴良組では外部組織に対して警戒して、幹部方に護衛をつけてます。リクオ様には五名から六名、他の幹部方にも二人以上の護衛をつけて万全の体制を保っています。そして藤次さんなんですが――――」

「いらんいらん、俺に護衛をつけるだけ無駄だ。それに今は……コイツも居るしな」

「当然っすよ、旦那の命は俺がどんな事が有っても守ります！」

その様子に氷麗は目を瞬かせ、首を傾げながら聞いてきた。

「御二人はどう言った関係なんですか？」

「俺は旦那の僕になりました」

「え？えええぇ！？僕は要らないって言ってたのにどう言う風の吹きまわしてですか！？」

猩影の言葉に驚きの声を上げて、詰め寄ってくる氷麗に藤次は追い討ちのように言葉を重ねる。

「俺は奴良組の庇護下から抜ける。独立して俺は俺の百鬼夜行を創り上げる」

「……え？な、なに、を……」

氷麗の思考は乱れに乱れ、今藤次が言った言葉が理解できなかった。

「でも、すぐにと言う訳じゃないぞ？じいちゃんには言ってからでないといけないから、爺ちゃんが帰ってくるまでまだ時間があるから」

「そ、そんな、嘘ですよね……？居なくならないですよね？正式な組員になって、これからも一緒にリクオ様を盛り立てて行きましょう？護衛の件だってせっかくお願いして、藤次さんに付かせて貰ったのに……」

「すまないな、もう決めてしまったから……」

氷麗はその目を見て無駄な事を悟ってしまった。

長い付き合いでその目をする時の藤次はけして折れない事を知って

いる。

「そう、ですか……。仕方有りません、私も着いて行きたいとも思いましたが……」

「それは、するつもりは無いんだろ？」

「ええ、私は奴良組若頭、奴良リクオ様の側近です」

氷麗と藤次は小さく笑い合っていた。
お互いに譲れぬ思いと覚悟を確認し、袂を分かった。

「若はこの順路でパトロールをしています。ですから逆を辿れば会えるはずです」

地図を見ながら氷麗に今日の移動範囲を教えてもらっていた。

「助かる。それじゃ、行ってくるわ」

「行って来ます、姐さん」

「お二人とも気をつけて……」

歩き去る二人が見えなくなると、氷麗はその場で膝を付き、一筋の涙を流した。

「袂を分かってもお慕いしているのは、いけない事なのでしょうか……」

～第拾漆幕～（後書き）

今回の話は別の百鬼を作るのなら話して置かなければと思い書きました。

感想、ご指摘何でも待ってます！

～第拾捌幕～（前書き）

更新です！

一週間を過ぎてしまった……これからも頑張るけどどうなるやら……

袖モギ様で無かった、書いてたらなんかこんな展開にw

～第拾捌幕～

「おかしい……」

藤次はリクオを探してリクオが通る筈のパトロール順路を逆走していた。
しかし、何時まで経ってもリクオの姿は見えてこない。

「そうっすね……もうそろそろ一周しちまいそうだ」

既に順路の半分以上を消化して、空もだんだんと白んで来てしまっている。
一度切り上げて屋敷の戻る事を考えなければならないかも知れない。

「それにしても、今日はカラスが良く飛んでますね」

先程から上空で鳴き声を上げながら煩く飛び回るカラスに視線を向ける。
空を飛ぶカラスは規則性も無く、一羽一羽まったく違う場所を目指して飛んでいた。

「カラス？もしや、既に……？」

猩影の何気ない一言で何かに気が付いた。

「猩影、急いでカラスどもを追うぞ！」

「え？何でッすか！？」

突然走り出した藤次を追いかけながら、猩影は何が何だか付いて行けずに首を傾げる。

「リクオ達は既に敵と接触してる可能性がある！カラスは恐らくカラス天狗達の遣いの奴らだ！」

順路を逆に辿って鉢合せしないと言う事は、途中で何かがあったと言う事。
更にカラスを飛ばすと言う事は何かを探している証拠でも有る。

「助太刀の必要も無いだろうが、急げば被害が少なくて済むかもしれない！」

藤次達は飛んでいくカラスを追って走り始めた。

「おいおい……コイツは……」

「土地神が居ない、だと？」

藤次達はカラスを追って、一軒の祠を訪れていた。
その祠には奴良組に所属する者が暮らしていた筈だったのだが、その祠は見る影も無く壊され、中に居たと思われる土地神の装束の切れ端が落ちているのみだった。

「奴ら、奴良組のシノギを潰して回るきか」

「ちくしょうっ！敵は何処行きやがった！」

「しょうがない、手当たり次第に土地神を見て回るぞ！」

町中の土地神を巡って駆けずり回る藤次たち。
しかし、三軒に一軒は居なくなっており、かなり速いペースで土地

神を殺して回っている様だ。

「土地神殺し専門の妖怪だな、幾らなんでも早すぎる」

「この近くで残ってる土地神といえば……」

「苔姫だな」

自分たちがいまいる住宅地の祠から一番近くにある神社に向けて足を向けた。
しかし其処に立ちはだかる影が２つ。

「流石に袖モギ様では貴様らを相手に出来るわけが無いのでな。此処より先は我らが通さん」

「ワシは袖モギ様なぞ如何でも良いんじゃが、暴れられるならぜひも無いわい！」

立っていたのは鶏冠を持った鳥の妖怪と巨体の禿男だった。

「鳥に禿、退け。今急いでいるんだ雑魚の相手をしてられるか」

「そういう訳にはいかんのだよ、これも我らの仕事なのでな」

口から幽かな火を吹きながら、冷静に藤次と対峙している鳥の妖怪。
隣では猩影が巨体の男と対峙していた。
急いでいて気が付かなかったが、この二人は猩影より僅かに強い妖気を感じる。

「幹部クラスか……しかもお前、さっきの品の無い炎を吐いてた奴だろ」

方々に散らばり、町を襲っていた複数の妖気の正体がこいつらだ。

「品が無いとは言ってくれるな、ならばその品の無い炎とやらで焼き殺してくれる！」

鳥の妖怪が炎を吐き、それが戦いの合図になった。
藤次達は咄嗟に回避し、炎で中央から分断され、猩影と引き離されてしまった。

「チッ！避ける必要なかったのに！猩影！」

「平気です！こんな奴俺一人で！」

立ち上る炎の向こうで、敵の大男と戦いが始まっていた。
其方の方に向かう為、炎の中に駆けようとした所で空からの攻撃が襲ってきた。

「邪魔すんじゃねぇ！焼き殺すぞ！」

「躊躇無く炎の中に駆け込もうとする当たり、貴様も炎の妖怪か」

「だったら如何した……」

「何どちらの炎が上か……比べるだけよ！カァッ！」

完全な鳥類の形を取って、空を飛び上空から炎を吐きかけてくる。

「めんどくせぇな、堕ちろっ！！」

炎を炎がぶつかり合い、周りに燃え広がる。
しかしその炎の勢いは藤次が圧倒し、押し返した。

「そんな速度で当たると思っているのか！」

押し返して勢いが弱まり、速度が落ちた事によって避ける事が容易くなった為に避けられてしまった。
藤次としては、住宅が密集する場所で本気で力を行使するわけにも行かず、攻めあぐねる結果になってしまう。

（むぅ……こやつワシの炎を押し返したか。力はワシより上か……）

（クソッ、本気だせねぇし、空だから直接殴れない……）

（（やり辛い……！））

藤次はもう少し開けた場所に移動しようと考えたが、この場を離れると猩影が孤立して幹部を一人で相手にする事になってしまう。
将来性は高いが、今の猩影では、まだ幹部クラスは難しい。

「ぐわあアァァぁーー！」

「猩影！？」

炎の向こう側から、猩影が吹き飛ばされてきた。
藤次は抱き止めてそのまま背中から地面に叩きつけられるのを防い

だ。

「猩影！？猩影！クソッ、やっぱりまだ無理だったか！」

「だ、大丈夫っすよ……まだ、やれます……」

気合で立ち上がろうとするが、身体はボロボロで、腕は嫌な曲がり方をしていた。

「ぐわっはっはっは！多少やりよったがワシの相手じゃなかったのう！」

腕を大きく震わせて、道を塞ぐ炎をかき消して巨体が姿を現した。
刀傷がちらほら見えるが、まだ余力を感じられる。

「こりゃ、住宅の被害とか考えてる暇ないかも知れないな……」

目の前に並ぶ二人の敵。
藤次一人ならば返り討ちにもできたのだが、近くには関係の無い一般人の住宅と、出来たばかりの自分の僕で自分に付き従ってくれている猩影だ。
本気を出してしまって、それらを傷付けてしまうのを恐れていたが、事此処にいたって、その様な事を言ってる余裕は無くなった。

やらなければ、その両方が確実に無くなってしまうのだから。

「しょうがないな……」

藤次は立ち上がり、自身の身体の熱を上げようと力を込め始めたとき、それは突然やってきた。
空から文字の書かれた巻物を巻いている女性が飛んできたのだ。

「なんだ？……小僧ども、命拾いしたな。我らはこれで引かせてもらうぞ」

「何？」

女性から渡された紙を暫らく見てから、鳥の妖怪はそんな事を言ってきた。

「我らが貴様らを止めていたのは袖モギ様の援護の為だが、袖モギ様がすでに敵にやられた。やった奴らがこちらに向ってきている、それにまだ会戦の時ではない」

それだけ口にすると彼らは、闇と共に消えていった。

「……ハァ、とりあえず、助かったって事だな……」

白んで来ている空を見ながら、溜息を漏らした。

～第拾捌幕～（後書き）

と、言うわけで、幹部登場の巻き！

猩影君はアニメで手洗い鬼に手痛くやられていたので、今回やられてみました。

感想、ご指摘なんでも待ってます！

～第拾玖幕～（前書き）

お待たせいたしました！

最近忙しくて中々更新が間に合わなく……

これからもなるべく急ぎますのでよろしくおねがいします！

～第拾玖幕～

「……うっ！？ぐぅっ！？……此処は？」

気絶していた猩影は、眼を覚ますと見覚えのある部屋に寝かされていた。
其処は慣れ親しんだ父親の住んでいた屋敷。
周りを見回し、間違いないことを確認すると、身体を動かした。

「っ！？旦那！旦那は！？」

猩影は身体から走る痛みで、一瞬にして意識が覚醒して昨夜の出来事を思い出した。
薄れ逝く意識の中、自身を背に二人の敵に対する自身の親分、朱天藤次。
その後すぐに意識が飛んで、どうなったのかまったく知らない。

「くそっ！だらしねぇ！旦那の役に、立てなかった……」

強い悔しさから拳を床に叩きつけ、歯がギリギリ音を鳴らしている。

「おっ！起きたのか」

「旦那！ご無事で！？」

扉を開けて藤次が姿を現した。
その手にあるお盆には簡素ではあるが、簡単な料理が並べられていた。

「ああ、俺は傷一つ無い。そんな事よりも、まず食事だ、食いながら昨日の事を話してやるよ」

小さく返事を返し、食事に手を伸ばす。
話を先に聞きたかったが、身体は正直で思っていた以上の勢いで食事を平らげていく。

「そうでしたか……リクオ様が……」

「ああ、あの時、リクオたちが俺達に気が付き向ってこなければ、もっと酷い事になっていた筈だ」

昨日の経緯を聞いた猩影は、またしても表情を曇らせる。

「余り気に病むな、相手は四国勢力の幹部。ある意味当然の結果だ、お前はゆっくり強くなれ」

「はい……あ、でも旦那。今日は学校では？」

外はまだ明るい。
時間は昼を回った所だろうか。

「それなら休んだよ。百鬼夜行と言っても俺とお前の二人だけだ、お前の治療をする人間は必要だろ？」

「そんな、俺の為なんかに休む事無かったのに……」

「勉強は何時も通りだし、午後から生徒会選挙で殆ど無いからな」

「それでも行って下さい！俺なら大丈夫っすから！」

「お、おう！？押すなよ、解ったから、行って来るから大人しくし

てろよ！？」

大怪我を感じさせない力で藤次を部屋から追い出し、屋敷を出て行くのを確認した。
確認した次の瞬間、猩影は膝を付いた。
痛みからではない、悔しさから膝を付いたのだ。

「くそっ……俺は……あの人の足手纏いになりたくねぇ……」

「何考えてんだか……」

追い出された藤次は仕方なく学校に向って歩いていた。
時間は既に昼を過ぎ、選挙は始まっているようだ。

「そう言えば……牛鬼が何か言ってたな……」

一人での登校は暇な為、これからの事を考えていた藤次の頭の中に、昨夜猩影を看病している時に訪れた牛鬼の事を思い出していた。

『狒々の息子と百鬼を作ると聞いてな……』

その話はリクオ達にもしたので、恐らく其処から聞いてきたのだろう。

『……其れが如何した？リクオを助ける、それは何も中からだけじゃないだろ。むしろ外からできる事もある、それにお互いに競う事で成長できる』

今でもその考えは変わっていない。

しかし、その時牛鬼は藤次に厳しい一言を浴びせかけた。

『お前ではリクオと競い合う事は出来ない……』

思い出すだけでも、拳に力が入る。

『リクオとお前では決定的に違うところがある。今はまだ良いだろう。しかし、そう遠くない内に其れは叶わなくなる、今のお前のままではな……』

『な、何が違うって言うんだ！？』

『……その違い、今はリクオに勝る利点ではあるが、百鬼を背負う今後は其れは足枷にしかならない。気が向いた時にでも尋ねて来い、私が教えてやる……』

牛鬼は意味深な言葉だけを残し、屋敷を後にした。
藤次は考えた、しかし幾ら考えてもリクオとの大きな違いは思いつかなかった。

「何だってんだ……」

毒づきながら、学校への道を進める。
そして学校に到着した。
体育館では既に生徒会選挙が始まっているが、鞄は教室に置いて置く事にして教室に向う。

「おお？朱天じゃないか、今日は休むんじゃなかったか？」

「先生こそ、もう体育館に行ってなくちゃじゃないんすか？」

教室の前で出会ったのは担任の教師だ。

「やって置かなくちゃいけない事があってな……そうだテスト今持ってるから渡しておくぞ？」

教師から渡されるテストを手にとって点数を確認する。
９８点のテストを確認すると「こんなもんか」と無造作に鞄の中に突っ込んでしまう。

「あぁ～……何だ、誰も居ないから話すんだがな？お前もう少し誰かに頼らないか？」

「何でっすか？自分で出来るからやってるだけ何すけど」

「勿論やってくれるのは助かるんだけどな？一人の生徒が何でもやるのは問題だって言われてるんだ」

話が見えてこない。
今の流れで言うと藤次よりもリクオのほうが当てはまる気がするの

だが。

「前生徒会に頼まれ事されたろ？」

「断ったのにしつこかったんで仕方なく……」

「教師から幾つも頼まれ事されたろ？」

「其れも仕方なく……」

「それじゃぁ……――――――――――――」

其処から並べられる仕事の数々に、頼まれてやっていた藤次すら驚いた。
始めは成績が良いからと先生の受けが良く、頼まれ事を少しだけ手伝ったのが始まりだったのだが、その伝手で生徒会やら、委員会やらの手伝いに借り出されていったのだ。

「結構やってんすね……」

「お前が感心して如何する……だから、もう少し誰かに頼ってくれないか？」

「まぁ、気が向いたらって事で……」

その返事に教師は溜息を付きながら『解った』と去って言った。

「今気が付いたけど、妖気が駄々漏れだな……」

感じなれた妖気が幾つかと知らない妖気が2つ。
優秀な奴があれだけ居ればいらないだろうと、急ぎはしなかったが
どうやら終わってしまったようだ。

「葉……狸か……」

体育館の開かれた窓から、大量の木の葉が飛んでいった。
其れを自分の教室から眺めて、決戦が近いのだろう、と藤次の第六
感が告げているようだ。

「待ってやがれ……下僕(しもべ)の借りは返させてもらう」

～第拾玖幕～（後書き）

犬神さんは一回も書かぬままいなくなってしまいました。
なんとか書きたかったんですがね、如何進めて良いのかわからずにこうなってしまいました。

感想ご指摘何でも待ってます！

～第弐拾幕～（前書き）

更新しました。

百鬼大戦開幕ですが、アッサリしてます。
次回かその次位で終わっていまうと言うクオリティの低さ！
申し訳ないです。

～第弐拾幕～

藤次の考えていた通り、決戦はすぐに始まった。
その日の夜、浮世絵町の空は闇にまぎれ、漆黒の雲が覆っていた……

「……時間のようだな……」

猩影の看病をしながら屋敷で腰を落ち着かせていた藤次は、馬鹿げた数の妖気を感じ取り、腰を上げた。

「俺も行きます」

包帯などを巻かれ、布団に横になっていた猩影はその身体を起こし、立ち上がった。

「お前は無理だ。怪我が治るまで大人しくしていろ」

「行きます！いや、行かなきゃなんねぇ！俺は旦那の下僕だ！その初めての出入りが一人だけ何ておかしい！」

「おいおい、まだ正式に組を作ったわけじゃ……」

「旦那は言った、百鬼を作ると……ならその時から旦那は百鬼の主だ！俺は何があっても付いて行きます！」

二人は、睨み合う様にその瞳を見続けていた。
暫らくすると、藤次が溜息と共に睨む事を止め、苦笑いを浮かべた。

「しょうがないな。付いて来い、ただし戦うことは許さない」

「はい！」

「さぁ、百鬼大戦に殴り込みだ！」

「君と僕は似ているね……それと挨拶が出来なかったが、恐らく鬼の彼も僕らに似ていたんだろうね」

腕を広げ、楽しそうに語る敵の大将、玉章。
ここから自分達の時代が始まると、信じて疑わないその自信に満ちた表情で此処に宣言する。

「お互いの”おそれ”をぶつけようじゃないか……百鬼夜行大戦の始まりだ！」

両陣営の間で、黒い煙が立ち込める中、にらみ合いが続いていた。

「どちらが先に動くか……」

カラス天狗が声に出し、戦況が動くのを待っていた時、リクオが何かを感じ取った。

（！……来やがったか。元々動くつもりだったが、早くしねぇとあいつも呆れるか……）

玉章の宣言から暫らく、中々動けずに硬直していた戦場をリクオが一歩踏み出した。

「何をしている！リクオ様を止めろ！！」

大将自ら先陣を切った事に敵味方困惑したが、その一歩が会戦の合図となった。

「大将が一番先に出てきたぞ！行け！殺っちまえば俺達の天下だぁーッ！」

そこから始まる入り乱れての乱戦は何処に誰が居るかを完全に隠してしまうほどの密度だった。

「自ら進んで先陣を切るとは、一体何の策があるのかと思ったが何のことは無い……唯のハッタリでしたな」

「奴良リクオはどこだ」

「さぁて……見当たりませんな……しかし、この百鬼の乱戦、死なずとも進めますまい……むっ？」

最後尾に位置する場所で、犬鳳凰と玉章はリクオの行動について話していたが、犬鳳凰がふと何かの気配に気が付いた。

「どうやら後ろからも客人が来ているようですな……そちらはワシの方でやっておきましょう」

「後ろ？……ほう、彼か……そうだね、僕は奴良リクオの相手で忙しい。任せる」

「はっ！」

翼を広げ、その場から飛び立つ犬鳳凰。

「君とも話したかったが……先ずはリクオを倒してからだ」

「旦那、一人でやりすぎです！雑魚を全部倒してるのは解りますが、俺にも手伝わせてください！」

「気にすんな、そんな事よりあまり俺に近付くなよ？火傷じゃすまないぜ？」

小物妖怪をその手に持つ赤熱した金棒で蹴散らしながら進む。
見たことの無い者ばかりだったのは、恐らくは四国勢力の援軍の類であるのだろう。

「そこまでの傷はもう無いんですから、俺にだって戦えますよ！」

流石は妖怪と言うべきか、既にその怪我の大半は完治して見える。
しかし、藤次は戦う事を許さず、ただ近くに置いて置くだけだった。

「殆ど治ったからと言ってもまだ痛むんだろう？無理するもんじゃないぜ」

その言葉に渋々とうなずき口を閉じた。
敵の半数を倒した頃だろうか、上空から突如炎が降ってきた。

「貴様らは此処から先には行かさんぞ」

炎を放ってきたのは、以前遭遇し戦った四国の幹部、犬鳳凰であった。

「おお、貴様かニワトリ野郎。今度はちゃんと焼き鳥にしてやるぜ？」

「に、にわっ！？舐めおって！その台詞、そっくりそのまま返してくれる！」

その場で大きく羽を羽ばたかせ自身の周りに炎を纏わせる犬鳳凰。以前本気で戦っていなかったのは、藤次だけではなかった。

「良い熱だ……久しぶりに気持ち良い風が吹きそうだ！」

炎と炎、その戦いの決する時はどちらかが消し炭になっている時なのかもしれない。
ゆっくりと後退しながら、猩影はそんなことを考えていた。

「ワシから行くぞ！カッ！！」

「そらよっとっ！」

吐き出された炎を藤次は手の金棒を振り、かき消した。
更にお返しとばかりに炎を差し向ける。

「ふんっ！以前と変わらんようだな！そのような速度ではワシを捉えることなど出来んぞ！カッ！」

その後も同じようなやり取りが数回繰返され、このまま体力の限界まで続くのかと思われたのだが、それは唐突に終わりを迎えた。

「そろそろ終いにして――――ぐっ！？」

「そら、終いはお前だよ！」

空を飛ぶ犬鳳凰が突然バランスを崩した。
更に藤次は届く筈の無い金棒を振り回し続ける。

「ぐわぁぁーーッ！！」

苦しみながら墜落する羽を焼かれた犬鳳凰。

その瞬間を笑みを浮かべながら見詰める藤次は、金棒を地に付ける。

（あれ？旦那の武器が小さくなってるのか……？）

熱にやられ、ドロドロと形を保てなくなっている金棒、いや、金棒と呼ぶには既に形が違いすぎる。
細長くなり、その形は物干し竿や槍にも見える。

「き、貴様。まさか最初から……」

自身の羽根を見詰めて、事態にやっと気が付いた犬鳳凰は藤次を問い詰めた。

「最初も何も、気が付かないお前が悪い」

最初は羽の先を狙い鉄を付着させ、徐々に焼いていき、バランスが崩れるのを待っていたのだ。
バランスが崩れたところで、その身体に鉄の塊を付着させ地に落すことが出来たのだ。

「まぁ、良い風が吹いたお蔭で気分が良い。……俺の最高の炎で焼いてやる……炎の妖怪として最高の最後だろ……？」

「ぬ、ぬおおぉぉぉおーーーッ！？」

「チッ、長く持たなかったな……また武器を新しく新調しなくちゃな」

煤が舞い、その視界を黒く色付けする中で、肩を落し歪(いびつ)に歪んだ己の武器を見下ろした。

「あんな時間を掛ける戦い方をするからっすよ。もっと他にやりようがあったんじゃないっすか？」

「いや、……その前から溶け出してたから、丁度良いかと思って……」

「まぁ、追々考えましょう？旦那」

「ああ……」

その足は、ゆっくりと未だ激しくぶつかる大戦の中に進んでいった。

～第弐拾幕～（後書き）

如何だったでしょうか？

やはり短いですね、もっと一つの戦いで長く書ければ良いんですが、どうも上手くいきませんw

日々勉強していきます。

～第弐拾壱幕～（前書き）

更新しました。

時間が掛かりまして申し訳ありません。

これからもこんな調子でしょうが構ってやってくださいW

～第弐拾壱幕～

（何も……見えねぇ……）

リクオは敵の大将を目の前に、夜雀の羽により視界を奪われてしまった。
見えない故に、敵の刀を受け傷を負い、しかしそれでも、降る事を拒否し、部下になる誘いを拒んだ。
何故ならこの敵だけは許せなかった。
百鬼を背負う者が百鬼を盾にしたことがリクオにとって何に置いても許すことが出来なかった。

（そう言えば、前にもこんな事があったな……）

振り下ろされる刀の気配だけを薄っすらと感じながら、この深い完全なる闇の中、リクオは昔の事を思い出していた。

「死ねぇ！奴良リクオ！！」

（確かあの時は……庭に隠れていて、夜になって何も見えなくなって、でも其処だけ……）

リクオの頭上から金属のぶつかり合う音が鳴ると同時に、リクオの

身体に冷たい物が覆いかぶさってきた。

「リクオ様、しっかり！」

「だらしねぇな、おい？お前は此処で止まる様な奴じゃねぇだろうが」

視界を闇で覆いつくされ、何処を向いているか解らないリクオの手を藤次は強引に掴み持ち上げ、体勢が崩れないように氷麗が空いた手を握り支える。

（雪のように白い手と、日の光のように暖かい手が……俺を？まえたんだ）

両の手に感じる正反対の暖かさに、リクオは小さく笑みを浮かべた。

「……貴様が鬼の子か。犬鳳凰は如何した？」

「あぁ？奴なら燃えたぜ？ちっと時間が掛かっちまったけどな」

「使えない奴め……」

味方、それも幹部の者が倒されたにも拘らず、動揺する素振りさえ見せる事無く、それどころかその死を使えないの一言で済ませた。

「まぁ良い、僕がかたをつければ済むことだ」

「気にいらねぇな、今此処で俺が跡形も無く――――」

「気をつけろ、夜雀だ！」

目の前にいる玉章に気を取られ、周りを浮遊する黒い羽に気が付くのが遅れた。

「チッ！」

すぐさま自身を炎で包み込み羽を燃やしたが、一歩遅く視界が暗闇に覆われた。

「これが夜雀の羽か……すげぇな」

何も見えない闇を前にしても態度を変えず、彼方此方に顔を動かす。だが何処を向いても闇が晴れる訳でもなく、この暗闇を作った夜雀

をただ感心するばかりである。

「夜雀……違いを見せろ。さっさとその役立たずを始末しろ！そしてお前は……」

玉章は藤次の背後に立ち、その手に持つ刀を横なぎに振るった。

「此処で死ね！」

藤次はその声に反応するように振り返ると、手にある細くなった金棒を構え防いだ。
しかし、玉章の力に身体が浮き上がり、吹き飛ばされる形になり距離が離れてしまった。

「……防いだ？目の見えない状態で？……まぁいい、鬼子は後回しだ。まずは奴良リクオ！貴様から葬ってくれる！」

「おわっと！？ちょっいてっ！？……あったた、目が見えないと着地もできやしねぇな」

視界を奪われ空に投げ飛ばされた藤次は、上下の感覚がなかった為に頭から落下し、後頭部を押さえ立ち上がった。

「離されたか……元々大将首はリクオが取らなきゃならんかったから良いけどな。……だが、此処はどこら辺だろうか？」

右も左も解らないとはこの事だろう、など如何でもいい事を考えながらその場で立ち尽くしていた。

「とりあえず集中……」

眼を閉じて、細くなり槍の形になった金棒を構えて集中する。
その背後から、音が立たないように忍び足でやってくる複数の妖怪達、藤次が夜雀の羽にかかった事を知ってやってきたのだ。

（クククッ、これで俺も幹部昇進だ！）

幹部である犬鳳凰を倒した男を始末できれば、それだけで一気に幹部になる事が出来ると考えた妖怪達は音を殺し、それぞれの得物を振り下ろした。

「あ、あああぁ？……何で……」

「雑魚は大人しく地に臥していろ。俺はそれどころじゃない」

振り下ろされた幾つもの刃は、彼の体を掠める事無く地に打ち付けられ、妖怪達の身体には心臓に位置する場所を藤次の槍に一突きにされていた。

「だけどまぁ……案外何とかなるもんだな」

血を飛ばすように大きく槍を振るうと、固まって此方を警戒する妖怪に向き直った。

「……三、四……十六か……来いよ、格の違いを教えてやるぜ？」

藤次は見えていない筈なのに、数をピタリと言い当てた。
襲い来る妖怪を突き、払い、打ち据えながらその数を減らしていく。

「奴良組の奴らは近付くなよ！今俺は敵味方の区別はつかんぞ！！」
大声で呼びかけながら、槍を回転させ血を飛ばす。
敵は数で押し始めるが藤次の猛攻はそれすらも払い除け、周りにうず高く積み上げられ身動きが取り辛くなると、端から火葬にしていく。
そしてまた一人その槍の餌食になった。
「な、何で……お前……目が見えないん、じゃ……！」
「教えてやろうか……？」
敵の波が一段落して殺しきれなかった妖怪の質問に、口の端を上げて笑いながら答える。
「熱だよ……」
「ね、つ……？」
「俺はさ、熱に敏感なんだ。だから妖怪や人間の温度が薄っすらとだが解るわけだ。それが誰かなのかは全く解らんが、周りが全て敵

って言う状態なら丁度良いだろ？」

藤次は熱に敏感である自身の体質を利用して、気が付かれない程度の熱を放射し、それを遮る物の動きを感じ取って動いていたのだ。藤次の頭の中には、サーモグラフィーのような熱分布が描かれているのかもしれない。

「今回始めて試したんだけどな。案外上手くいくもんだ」

苦しみながら藤次の説明を聞いていた妖怪は、ネタが解ったとてもそんな物どうしようもない、とそのまま力尽きた。

「さてと、動くに動けないんだよな。さっきも言ったけど敵味方の区別が付かん。間違えて奴良組の奴らを殺してしまいそうだな」

その場で腕を組み暫らく暇を過ごす。
誰かが夜雀を倒すまでこうして無くてはならないのかとヤキモキしながら時間が過ぎ去るのを待った。

「ハァハァ、やっと見つけた。旦那！勝手に進まんでください！追いかけるこっちの身にも――――」

「フンッ！」

「ぬおぉぉっ！？ちょっと旦那！いまのは確実に死んじまいますよ！！」

「お？すまんすまん、猩影だったか。近付いて来るからつい……」

反射的に近付いてきた物に突きを放ったが、間一髪で猩影は避けた。しかしその時、髪を数本切れ頬から血が垂れた。

「……まぁいいですけど……って何で目を閉じたままなんすか？」

冷や汗を拭いながら、今度こそ藤次の近くまで近寄ると目を閉じたままの藤次に質問した。

「いや、夜雀の羽に刺されて目が見えないんだ」

「それならさっき晴れましたよ？誰がやったか解らないっすけど……」

「……え？」

～第弐拾壱幕～（後書き）

何とか三話に分けれそうです。

あまり短くても、あれ？ってことになりますからね。

今既にあれですが（汗）

それでは感想ご指摘なんでもまってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3517n/

ぬらりひょんの孫～その隣に立つもの～

2011年2月17日19時19分発行